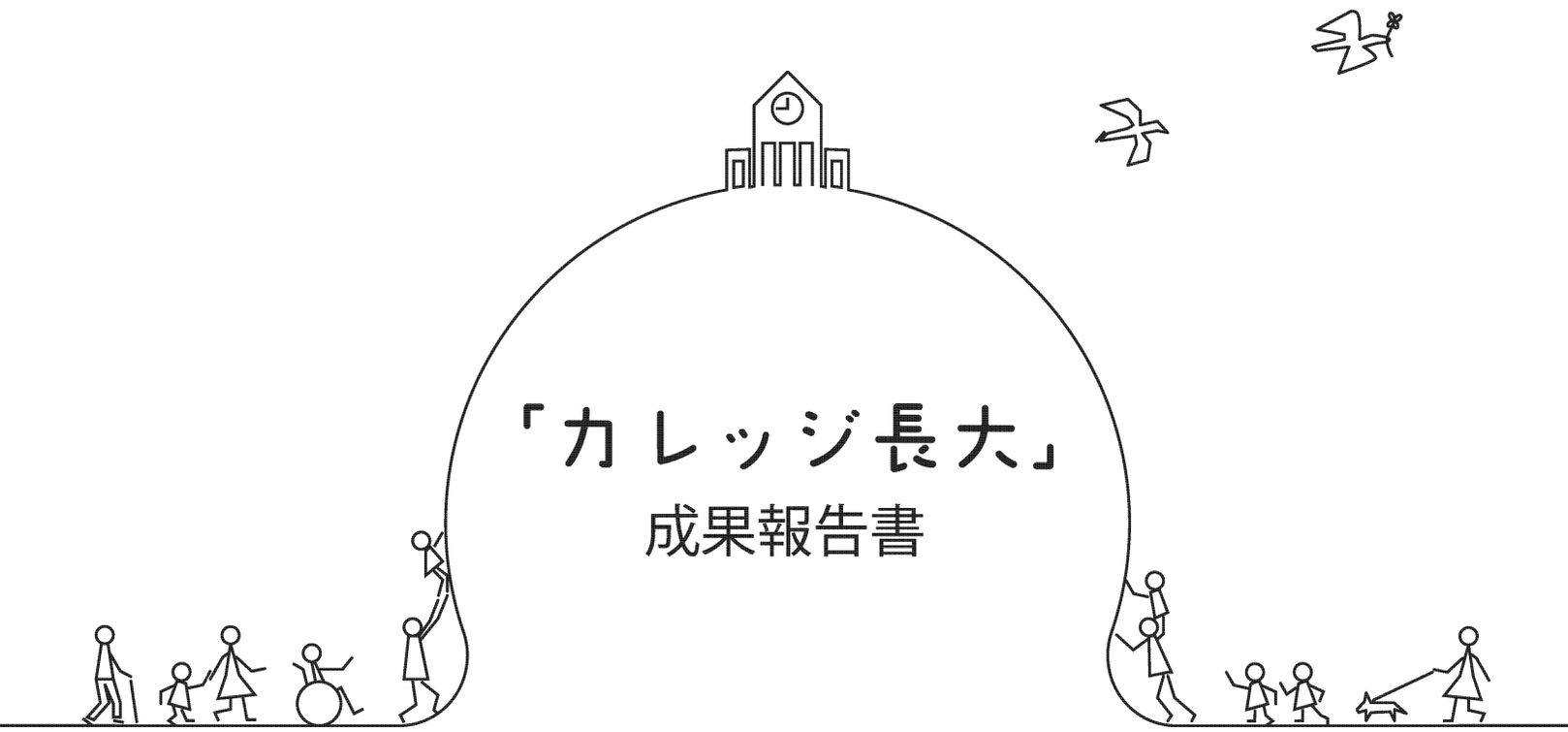
令和６（2024）年度文部科学省委託事業
学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業
「大学・専門学校における生涯学習機会創出・運営体制のモデル構築」



「カレッジ長大」
成果報告書

障害者版 STEAM 教育のプログラム開発を目指して Ver.2
ー自由になるための方法（リベラルアーツの「A」）を意識しながらー

令和７年２月

長野大学

令和６年度「カレッジ長大」教育プログラム開発事業

はじめに　～巻頭言として～

2025.1.10

長野大学　学長　小林　淳一

改正障害者差別解消法により、2024 年4月1日より「合理的配慮」の提供が義務化され、障害者の学びに関して教育を希望する障害者をどのように支えていくべきか、様々な角度から検討していかなければならない。長野大学社会福祉学部では、上述の観点から障害者支援の在り方を教育研究の大きな柱として検討している。「2024 年度カレッジ長大・成果報告書」は、文部科学省の令和６年度「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」の委託事業に、昨年度に引き続き採択され、2024 年７月から12月まで約6か月実施し、その成果をまとめたものである。

今年度の受講者は16名であり、昨年度に引き続き受講した者は８名であった。年齢層は幅広く、教育プログラムは全８回の開講であった。各回には、理科的な学び、演劇体験、対話型鑑賞等の内容が組まれていたが、受講者に人気が高かったのは、本学の大学祭への参加であった。初めて大学祭に参加した人にとっては、見るものが新鮮で、刺激的であったようだ。

プログラムの最終回には成果報告会が組み込まれている。そのため受講者は直前の2回を使って成果報告会の発表準備を行った。それぞれ一人ずつ参加しての感想や自分の好きなものを発表することにした。パネルにペンや折り紙を使って訴えたいことを表現した。発表内容は様々であるが、一つのことを深く掘り下げ自分の世界を作り上げている様子がくみ取れた。制作に当たっては、本学の学生が一人一人の受講者に寄り添い、受講者が納得する形で制作が進められた。この成果発表会が本プログラムの大きな特徴であり、受講者の主体的な自己表現を学ぶことに繋がっていると考える。

多くの受講者からは、大学で学ぶことの体験を通し、大学を身近に感じられる存在となり、来年も受講の機会があれば参加したいと言っていた。発表で最も印象的であったのは、今回参加したメンバーの様子をカラフルな折り紙で表現し、明るく元気で学び、これからも一緒に仲間として活動したいと力強いメッセージがあったことである。大学で学ぶ目標の達成感が、それぞれの自信に繋がってほしいと願っている。

カレッジ長大の特徴の一つとして、本学の学生が、サポーター係として、担当の受講者に寄り添う形を取っている。障害者とこんなに密接に付き合うのは初めての学生もおり、最初のうちは戸惑いもあったことと思う。相手の立場に立って、コミュニケーションを取っていく中で打ち解け、心が通い合う関係になっていった。その様子は、傍から見ていてもよく分かった。成果発表会では、受講者と一緒にステージに立ち、受講者が発表しやすいように相手の反応を見ながら、細かくサポートしていた。学生は今回の教育実践を通し障害や障害のある人に触れることができた。教育的観点からすると座学で教えられることの遙か数十倍も学修できたのではないかと思う。これからの教育の在り方に大きな示唆を与えている。最終回が終わり、学生達は受講生と別れる際、片隅でお互いにハグし涙を流していたのが印象的である。

以上

令和６(2024)年度文部科学省委託事業
学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業
「大学・専門学校における生涯学習機会創出・運営体制のモデル構築」

障害者版 STEAM 教育のプログラム開発を目指して Ver.2

―自由になるための方法（リベラルアーツの「A」）を意識して―

目次

1.カレッジ長大(障害者の生涯学習)の概要 ……1

2.プログラム実施状況 ……5
(1)第 1 回 ～ 第 8 回 ……5

(2)成果報告「私」編 ……19

3.受講者の声　カレッジ長大の活動で得られたこと ……51

4.学生スタッフのことばイメージマップ ……53

5.学生スタッフの座談会 ……55

6.広報関係（大学 HP、報道） ……60

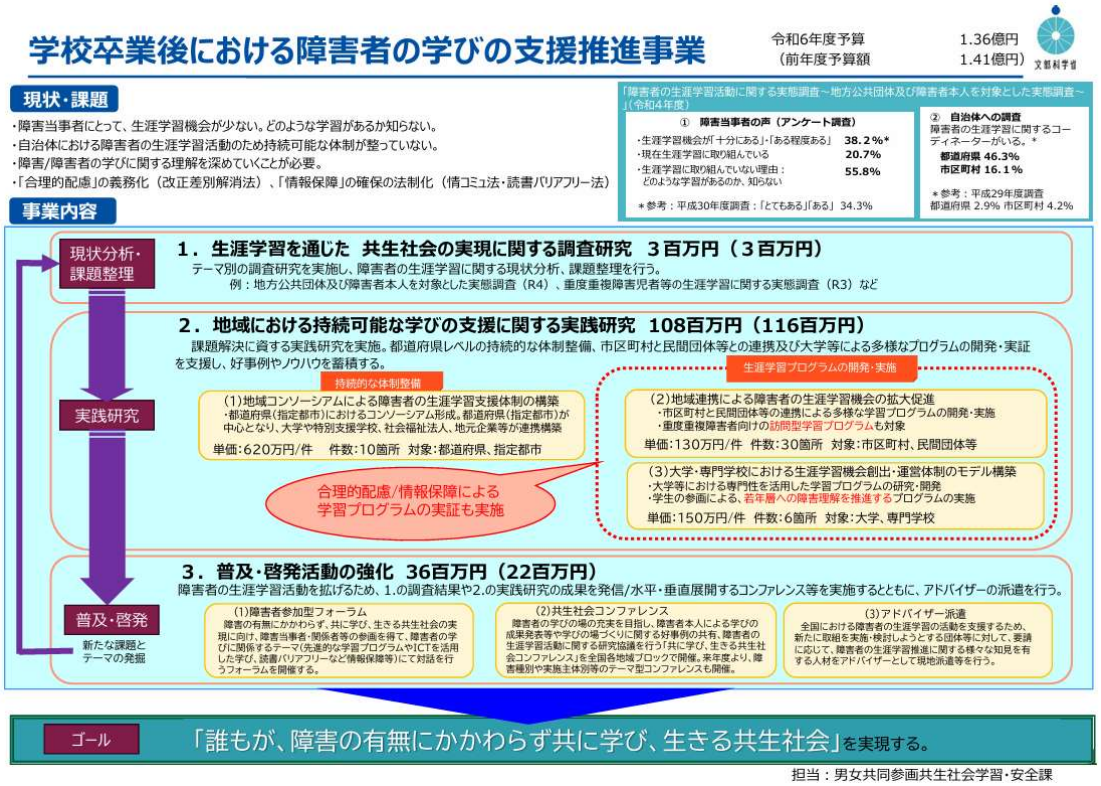
7.受講者の家族、事業所ソーシャルワーカーの声 ……71

8.カレッジ長大学生スタッフアンケート集計結果 ……75

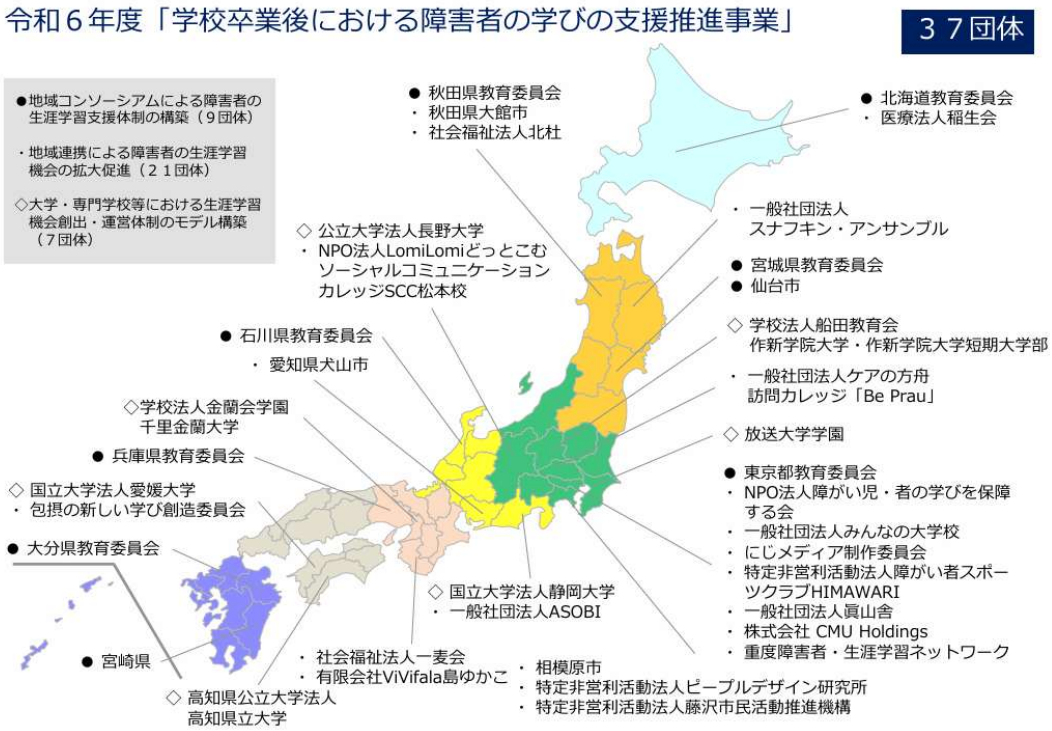
9.カレッジ長大に関係した人達 ……87

1.カレッジ長大(障害者の生涯学習)の概要

(1)文部科学省の事業概要(2024 年度版)



(2)全国採択状況(2024 年度版)



（3）2024 年度版カレッジ長大の概要

別添９-2（別紙１）　取組概要　大学・専門学校等における生涯学習機会創出・運営体制のモデル構築

公立大学法人長野大学（所在地：長野県上田市）

事業名　STEAM教育の要素を取り入れた障害者の学び直し(Reskilling)モデルづくり　Ver.2

事業の趣旨・目的

本事業は、障害者の学び直し(Reskilling)の要素を組み入れながら「A(Arts)」に力点を置いた障害者版STEAM教育と、インクルーシブなPBLプログラムをドッキングさせた〈障害者とともにある生涯学習モデル〉の構築を目指している。

事業実施体制・連携先

・連携協議会構成メンバー;上小圏域障害者総合支援センター、上田市役所、上田市社会福祉協議会、千曲荘病院(精神科)、長野大学教職員
・コーディネーター;障害福祉の現場や職能団体の活動に携わった経験のある者、 障害当事者活動の実践を踏まえ、教育・研究を行っている者
・授業科目「ボランティア論とその活動」等で学んだ学生達が、受講者に対して 個別サポーターになるなど、学生スタッフの活動が本事業の中核的役割を担う。

事業内容

・2023(令和5)年度に長野大学は、オープンカレッジ「カレッジ長大」を新規に開いた。
・カレッジ長大の学習プログラムは、障害のある人たちの生活を豊かにし、新しい人間関係を作っていくことをねらいとする。
・2024年7－12月にプログラムを実施する計画である。
　自由になるための体験活動(liberal Arts)として、、学生企画によるアイスブレーク、受講者の快適な生き方を目指す講座、日常を各自の言葉で語るつどい(哲学カフェ)、大学を知るための体験ツアー、身体ほぐしを行うためのスポーツ、演劇パフォーマンスの体験、科学実験へのアクセス、成果発表等がその企画内容である。
・本プログラムにかかるコンセプトは以下のとおりである。

情報(コト)×モノづくり(モノ)×スポーツ(カラダ)×表現(ココロ)×社会福祉(クラシ)
STEM　A
で障害者対応型 STEAM 教育を体験として≪アソビュ!≫しながらマナぶ。

事業終了後の目指す方向性

・本事業が障害当事者の学校卒業の学びの社会資源となることで、18歳未満と18歳以上とのシームレスな互助関係を地域の中で形成していく。
・カレッジ長大という教育資源の提供を通じて、地域社会に対して「大学の開放化」を行うことで、地域貢献という社会的責任を果たしていく。

その他

演劇パフォーマンス

成果報告会

（4）2024 年度版カレッジ長大プログラムのコンセプト

情報（コト）×モノづくり（モノ）×スポーツ（カラダ）×表現（ココロ）×社会福祉（クラシ）
STEM　A
で障害者対応型 STEAM 教育を体験として≪アソビュ!≫しながらマナぶ。

※文部科学省は、「STEAM 教育等の各教科等横断的な学習の推進」の中で、〈STEM（Science, Technology, Engineering, Mathematics）に加え、芸術、文化、生活、経済、法律、政治、倫理等を含めた広い範囲で A を定義し、各教科等での学習を実社会での問題発見・解決に生かしていくための教科等横断的な学習〉ととらえている。

（5） カレッジ長大の理念等について（2024 年度版受講者募集チラシより一部）

1.「カレッジ長大」とは

障害のある 18 歳以上の人たち（学校卒業後）に対して、長野大学が開いたオープンカレッジ（以下、カレッジ長大）で、学習の場を提供する団体です。

2.「カレッジ長大」立ち上げの背景

（1）私たちは、障害がある・ないに関係なく、生涯を通じて、様々な学びを積み重ねることが大切な考え方であるという社会に生きています。

（2）障害のない人に比べて、障害のある人たちが学ぶ機会は、限られています。

（3）長野大学は、2023（令和 5）年度に初めて、大学という場所で、障害のある人たちが学ぶプログラムを立ち上げました。

（4）カレッジ長大の学習プログラムは、障害のある人たちの生活を豊かにし、新しい人間関係を作っていくことをねらいとしています。

（6）2024 年度版カレッジ長大の具体について

①受講の対象者

間口として、軽度の知的障害がある18歳以上の人

②参加条件

・受講申込書の提出

・長野大学の学生との事前面談

・長野大学への移動について、送迎を含め、自力でできること

・プログラムへの積極的な参加

受講者 16 名　学生スタッフ 22 名

③プログラム内容

No.	日 時	内 容
1	7/28(日) 10～15 時	開校式 自己紹介と交流 研究とは
2	9/14(土) 9～12 時	ボッチャ大会
3	10/5(土) 10～15 時	ダンス 音楽 創作ミュージカル
4	10/19(土) 10～12 時	大学祭めぐり
5	11/9(土) 9～15 時	哲学対話 対話型鑑賞 チャレンジド・紙ヒコーキ
6	11/30(土) 10～15 時	成果発表会の準備・その 1
7	12/14(土) 9～12 時	成果発表会の準備・その 2
8	12/15(日) 10～12 時	成果発表会 修了式(学長から)

④受講者(計 16 名)の属性

項目	結果
年代別	20 代/7 名 30 代/7 名 40 代/2 名
男女別	女性/6 名 男性/10 名
障害種別	知的障害/15 名 身体障害/1名
居住地	上田市/14 名 青木村/2 名
所属	障害福祉サービス利用/15 名 就職/1 名
継続・初参加	2023 年度からの継続参加/8 名 2024 年度初参加/8 名

⑤学生スタッフ(計 22 名)の属性

項目	結果
学年別	1年生/6名 2年生/9 名 3年生/6 名 4年生/1 名
男女別	女性/17 名 男性/5 名
学部別	社会福祉学部/21 名 環境ツーリズム学部/1名
役割	統括・緊急対応 広報・記録 サポーター係
継続・初参加	2023 年度からの継続参加/11 名 2024 年度初参加/11 名

2.プログラム実施状況

第1回「はじめまして」(7/28)

2024 年度のカレッジ長大が始まった。
まず、自分の名札を作成した。
受講者一人ひとりが「どんなカードだったら、相手にインパクトを与えられるか」を考え、豊かな個性を出して作り進めた。その中で会話が生まれ、緊張がほぐれていく様子が伺えた。

初めてで緊張するな

始

今年はどんなことするのかな？

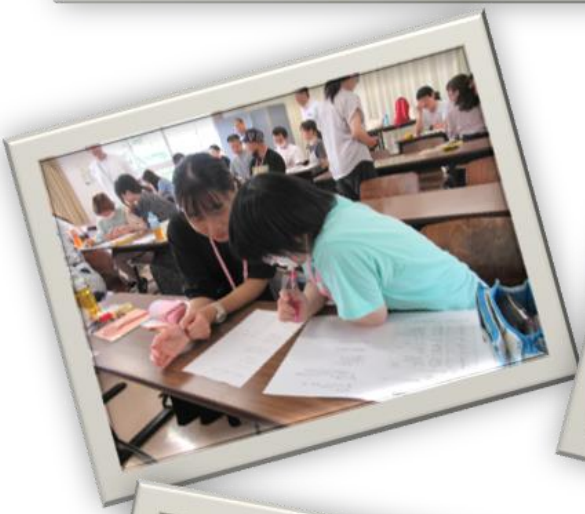
今年はどんな人が来るかな？

午後の、「研究について知る」というプログラムでは、数字や色といった身近な題材を基に、会場内で何が人気かを予測し、その後実際に参加者にインタビューして結果を確かめるという探究的な活動が行われた。
学びの深さと楽しさが見事に両立した機会であった。

緊張と人との新しい出会い、非常に充実した船出になった。

（文責　中原蒼生）

カ
レ
ッ
ジ長大

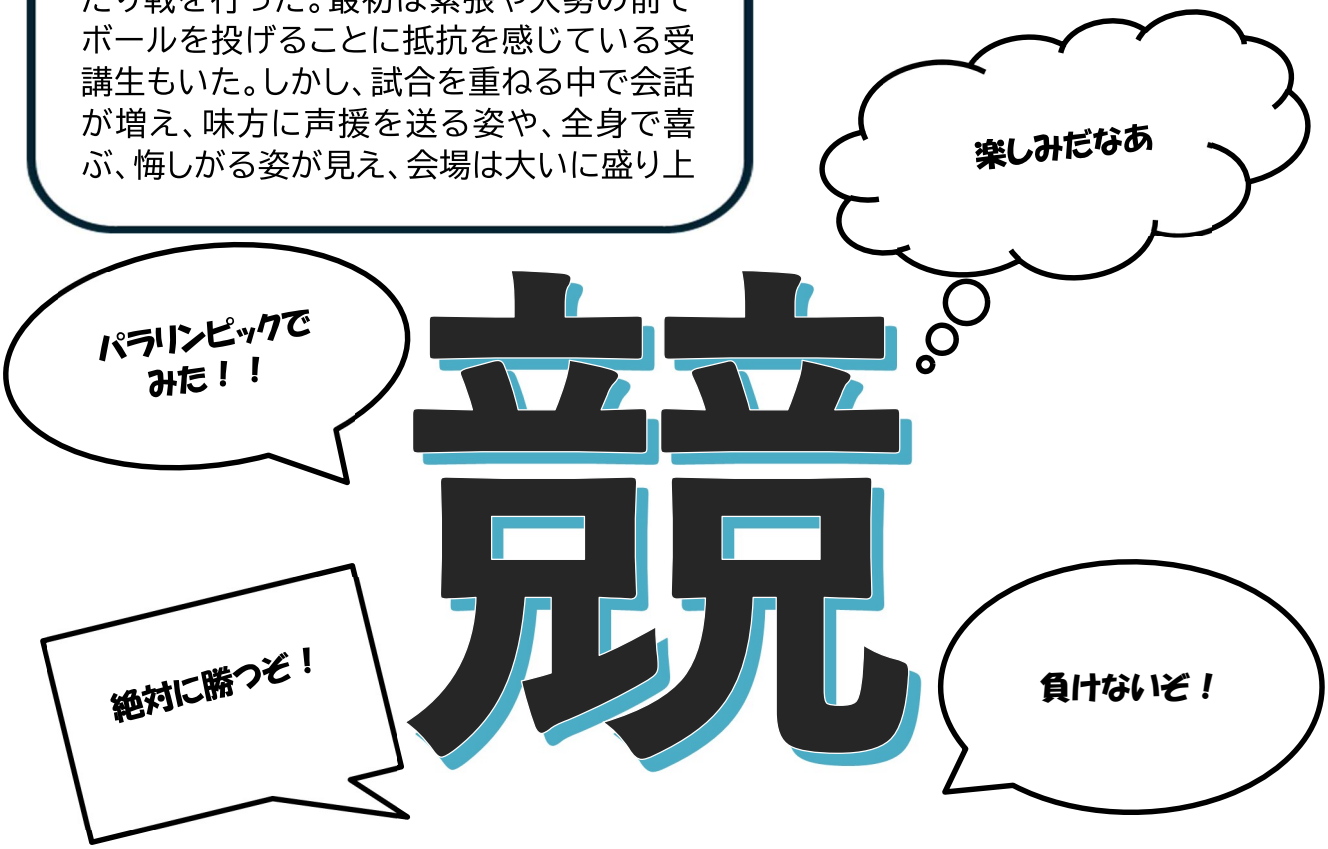


ようこそ
カレッジ長

1ばんにんきのいろ
・1い 14ひょう? → あお
・2い 6ひょう → あか
・3い
・3い 6ひょう → みどり きいろ くろ
・3い
・6い 20ひょう → しろ
長

第2回「スポーツ」（9/14）

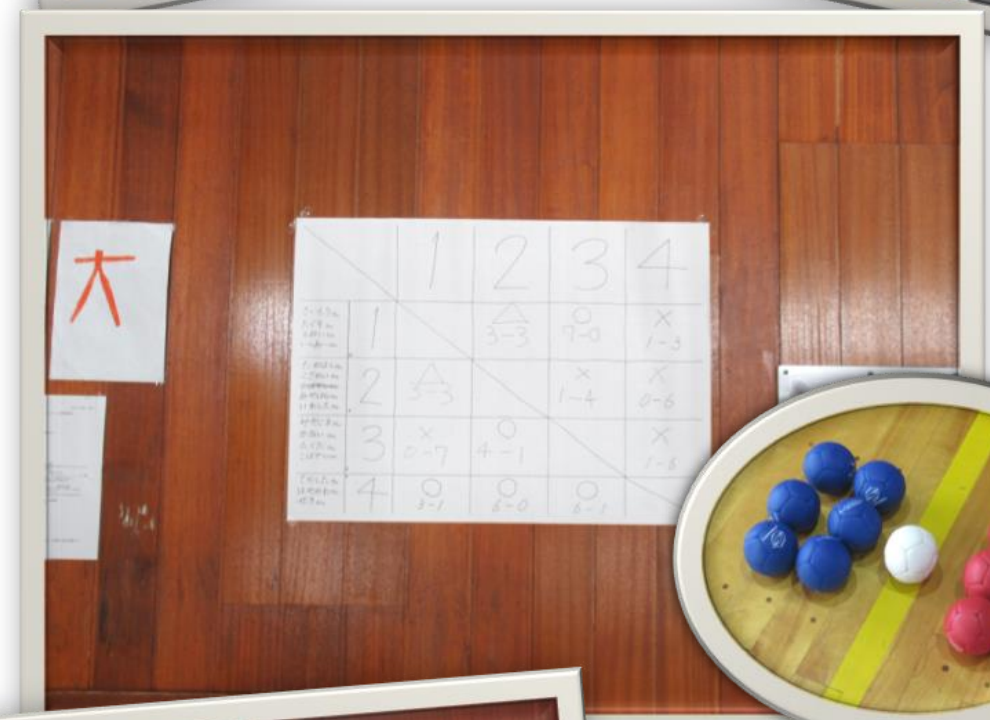
今回のカレッジ長大では、「ボッチャ」を行った。
４つのチーム、二つのコートに分かれ、総当たり戦を行った。最初は緊張や大勢の前でボールを投げることに抵抗を感じている受講生もいた。しかし、試合を重ねる中で会話が増え、味方に声援を送る姿や、全身で喜ぶ、悔しがる姿が見え、会場は大いに盛り上



スポーツを通じて雑談や冗談を交わし、参加者同士の距離が自然に縮まり、お互いの理解と絆が深まった時間となった。

競い合いながらも協力し合い、笑顔が絶えない瞬間が多く、共に過ごした時間が大きな心のつながりを生んだように感じられた。

（文責　中原蒼生）


大
1 2 3 4
1 △ 3-3 ○ 7-0 × 1-3
2 △ 3-3 × 1-4 × 0-6
3 × 0-7 ○ 4-1 × 1-5
4 ○ 3-1 ○ 6-0 ○ 6-1

第３回「演劇体験」(10/5)

スタッフと受講生が一緒にやったことでより多くの人と交流することができた。ストレッチから始めたことで参加しやすかった。

グループの活動を通して集団行動やコミュニケーションに慣れることができた。ダンスや歌に苦手意識があったが、やってみると楽しかった。

他の人と一緒に踊れて楽しかった。台本を見ずにアドリブなどを入れながら演劇に参加できた。みんな楽しそうだった。

第3回目は、外部講師をお呼びして「ショート・ミュージカル」を行った。まず初めに、ストレッチを行い、体をほぐした。その後、歌とダンスの練習をし、「DAISUKI」というショート・ミュージカルをグループごと演じた。みんな緊張している様子だったが、無事に演じることができた。

（文責　横川愛花）

カレッジ長大

カレッジ長大

カレッジ長大

第４回「大学祭めぐり」(10/19)

統括の仕事ない！？

学生出店のゲーム
センター行きたい！

時間足りない！

去年と同じじゃ
ないでしょうね！

階段も坂も多い。
移動が大変。

第 4 回カレッジ長大はりんどう祭。楽しみにしていた方が多く、みんな早く出発したい。それぞれが好きなものを買いに行き「これをください」。参加したゲームでは全力で目指した勝ち。笑顔があふれ、たくさんのお店でにぎわうこの場所はみんなの夢の街。

宴

たこ焼き
おいしい

大好きな
コーヒーがある！

みんなでボードゲーム
やりたい！

楽しみすぎて早めに
着いちゃった！

プログラムとして参加したのはたったの二時間。好きなものを食べに行き、サークルの発表を観ていたらあっという間に終了の時間。受講生からの時間が短いという不満。もっとそこにいたくなるくらい幸せな空間。もっと考えたい改善の手

（文責　森隆之助）

BALL
DARTS

第５回「哲学・紙ヒコーキ」(11/9)

正解のない問いは
難しい…

遊びたいよぉ

最初にみんなで考えたのは正解のない問い。これはたくさん考えなければならない時。アイデアもっと出てこい！そう願いながらみんなで創り上げた作品は最高に良き。次に写真を見て創った物語。見た写真は同じなのに物語に同じものはない。そこで見えてくる個性が良い。

これが大学生の勉
強か！

これは何の写
真だ！

紙飛行機のかっこよさは誰
にも負けない！

一番飛ぶ紙飛行機を
作るぞ！！

午後に作ったのは紙飛行機。遠くまで飛ばしたチームが勝利。よく飛ぶ機体に惹かれる興味。練習ではみんなよく飛び、いい調子。本番で燃える闘志。紙飛行機の見た目もこだわり、彩を装備。全部が良く飛び、見た目も美しい。全員MVP！

（文責 森隆之助）

カレッジ長大

第6回(11/30)・第7回(12/14)
「成果発表会のための」

実際に本番で使用する会場に行くことで、ある程度緊張をほぐす効果があったと思う。ステージに立ってリハーサルをする人も、客席からステージを見ておくという人も、会場の雰囲気を感じることができたと思う。

「私」というテーマはあったが、折り紙を貼ったりイラストを描いたりと、それぞれの作品作りに受講者の個性が出ていた。

備

リピーターの受講者は、パネルに昨年度との違いを作ることに苦戦する姿も見られた。参考として昨年度の作品を見てから作業に取り掛かっていたが、明確な見本がないことでそれぞれの個性が見られるパネルが完成したと思う。

成果発表会に向けた準備として、一人一枚のパネル作りと、発表のための原稿作りを行った。発表のテーマは「私」。自分の好きなものや、カレッジ長大への思いについて考える姿が見られた。サポーターと力を合わせてパネルを完成させていく人、一人でどんなパネルにするか考える人。それぞれのペース、やり方でパネル作りが進んでいき、成果発表会本番に向けてのリハーサルも行われた。

（文責　青木夢花）

私の
すきなもの

第８回「成果発表会」(12/15)

成果発表会が始まる前から少し緊張した空気感があった。しかし、本番が始まると受講者一人ひとりが堂々と発表していた。

発表会が終わった後の受講者はとても晴れ晴れとしていた。話を聞いてみると、「あまり緊張せずに話せた」という回答が多かった。また、「来年もあれば受講したい」と言ってくださる方もいた。

最後の修了証を受け取る際の受講者の皆さんは、一年間のカレッジ長大が終わって達成感を感じているようなすがすがしい表情をしていた。

カレッジ長大が一年を通して行ってきた内容のビデオや写真をビデオムービーにしてまとめた。受講者一人ひとりが、二回に分けて制作した「私」をテーマにしたパネルを発表し、学生スタッフが協同する形での発表会が一般の方にも開放されて行われた。

（文責　成沢久留美）

令和六年度
カレッジ長大
修了式

「私の推し」

H.M さんは、ご自身の推しをランキング形式で表しました。

韓国のアイドルが多いことから韓国語の飾りを付けたり、ペンライトを折り紙で作って「アイドルとファン」を表現したりするなどの工夫を凝らしました。

H.M さんのお気に入りポイントは、上の画像の右下にある「推し」のうちわを掲げているファンです。

○サポーター係として関わった感想

H.M さんは初回から意欲的で、自分でできることに対するサポートは常々最小限でした。また、どの行事においても積極的で、学びの姿勢を常に崩さず問題に真っすぐに向き合う方でした。成果発表会もお一人で力強く発表されていて、サポーターながら圧倒されたのを覚えています。その姿を見て、私も学ばされる部分が数多くありました。

今年初めて一年間サポーターとして多くの受講者さんと関わりました。困難もありましたが、交流を行う中で、日常会話や意見交換を繰り返し行いながら信頼関係が築かれていく感覚が、私の活動の糧となっていました。受講者さん一人ひとりの思いや施設の現状なども知ることもでき、今までに得たことのない学びを得ることができました。

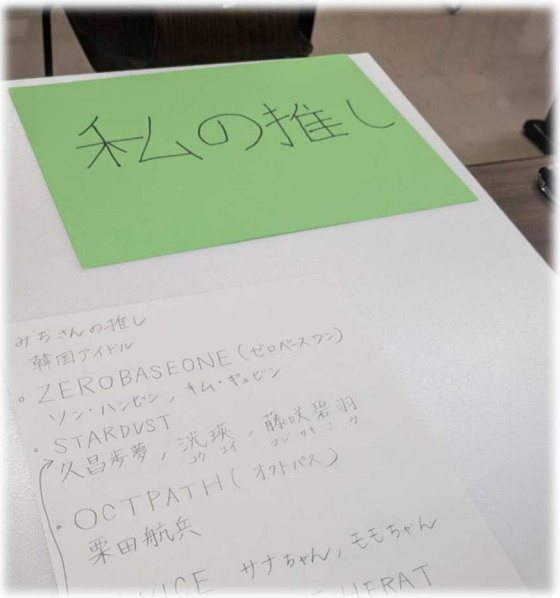
障害など関係なく、それぞれが対等に学び合える貴重な機会を提供してくださったカレッジ長大に感謝申し上げます。

○制作過程の様子と行ったサポート

制作過程において、H.M さんは「自分の好きなもの」に焦点を当て、発表を聞く人が分かりやすいようにとランキング形式で作成を始めました。

作成していく中で、H,M さんが好きなアイドルの好きなところを一人ひとり説明し、楽しそうに話してくださいました。

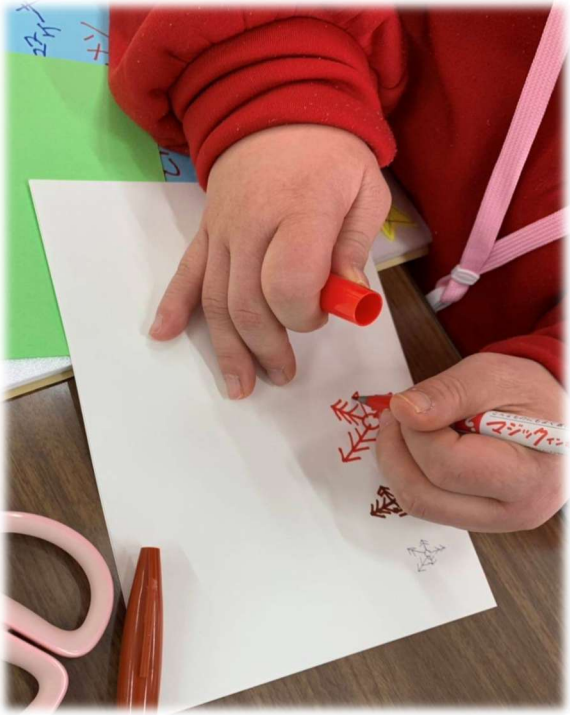
ランキング表の周りにある装飾を H.M さんが担当し、文字をきれいに書くことが苦手だということで、私は H.M さんがあげてくださったアイドルの名前を書いてサポートしました。また、発表の際に、二分間を原稿なしで話し続けるのは難しいだろうと話し合い、二人で協力して二分間分の原稿を仕上げました。



（文責　澤田夕嬉）

「NEW 好きなこと　BY さとの」

私たちは時間の関係で、昨年の作品を参考に「NEW 好きなこと　BY さとの」というテーマでパネルを作成しました。昨年と変わらず好きなものを挙げる中で、新しく好きになったことや変化を見つけることができ、非常に楽しい経験となりました。特に、好きなものを書いているときの T.S さんの笑顔がとても輝いており、その姿が今でも印象に残っています。発表では T.S さんが欠席のため、一人での発表となりましたが、終わった後には大きな達成感を得ることができました。



【制作過程の様子】

　左の写真は、T.S さんが雪の結晶を作成している様子です。T.S さんはとても手先が器用で、綺麗に字を書くことができます。また、作品全体を見渡しながら、何を付け加えようかと考える姿勢も印象的でした。T.S さん独自のアイデアや工夫が作品に反映され、完成度を高めていく過程はとても楽しかったです。

【学生スタッフとしての参加を通じて】

　今回、初めてカレッジ長大の学生スタッフとして関わる機会をいただきました。この貴重な経験に感謝しています。全体を通して、思い通りに進まないことが多くありましたが、その中で成功するためには臨機応変に対応する力が必要であることを学びました。この経験を通じて、柔軟性や適応力の重要性を実感しました。

（文責　三輪千晴）

「カレッジ長大を通して感じたこと」

去年に続けての参加だったので、去年とは違った学びやさらに成長したことについてまず書きました。大きなテーマは特にありませんが、受講者さんが感じたことを素直に書いてくださったことが特徴だと思います。

また、来年は参加できるか分からないとのことだったのでカレッジ長大で関わった人たちに向けてのメッセージも書いてくださいました。真ん中にある一番大きな紙は受講者さんの今後の目標とのことです。

どんなことを書こうかまとめるのに苦労されていましたが、最終的に自分自身で振り返り自分の言葉でカレッジ長大で学んだことを書いてくだいました。

パネルの余ったところには二人でお互いの好きなキャラクターを描いたり、折り紙を折って貼ったりして明るいパネルにできたと思います。

受講者さんのお気に入りポイントは好きなゲームのキャラクターだそうです。絵がとても上手で、自分が納得いくまで黙々と書かれている姿がとても印象的でした。

当たり前のことかもしれませんが、二人で協力しながら一緒に完成できたことがうれしかったです。

受講者さん自身、自分自身で何でもやられる方でした。私は少しのサポートを行なえばよかったのですが、その代わりに「寄り添う」ということを意識していました。受講者さんが悩まれていたり、正直な気持ちを言えていないのかもしれないと感じたときは焦らずゆっくりお話をするようにしていました。自分の思ったことを沢山言う方ではなかったので、何を楽しいと感じるのかなどをお聞きして受講者さんの素直な気持ちを引き出せるように意識しました。

カレッジ長大の受講を通して、私も受講者さんの味方であることを感じていただければと思いながら活動していました。

最初は、とにかく受講者さんと沢山お話ししてコミュニケーションを図ろうと思っていましたが、話しをすることが全てではないと徐々に感じるようになりました。受講者さんの行動から読み取れることも沢山あります。時には見守り、必要なときにサポートすることも必要なのではないかと感じました。受講者さんが困っていると思って善意で話しかけたとしても、逆に混乱させてしまうことがあるというのも気づけたことの一つです。受講者さんに寄り添い、本人にとってのベストは何なのかを常に考えていくことを大切にしたいです。

カレッジ長大を通して、私自身、受講者のみなさんに教えていただくことや励まされることが沢山ありました。とても良い出会いに恵まれ私自身も成長することができてよかったです。

（文責　齊藤優美）

「大切な家族」

F.Y さんは大切な家族を春夏秋冬を通して表現しました。

父を地球全体としての春夏秋冬、人類は海から生まれるという事で、

母を海のセイレーンをイメージしてつくりました。

F.Y さんの作品のお気に入りポイントは、自分で拾ってきた落ち葉や松ぼっくりです。

制作過程の様子と行ったサポート

F.Y さんは主体的にテーマを設定し、黙々と作業に取り組んでいました。

役割分担や配置もF.Yさんから提案して下さりました。

F.Y さんが思い描いた部品が完成すると笑顔で見せて下さりました。

F.Y さんのイメージした作品を制作する中で表現したいけど少し複雑なマークやイラストの為、難しくて出来ないとおっしゃられた所を私が作り、サポートしました。

サポーター係として関わった感想

F.Y さんは物語を作る際や成果発表の作品を制作する際に、私よりもはるかに想像力があり、尊敬したのを今でも覚えています。

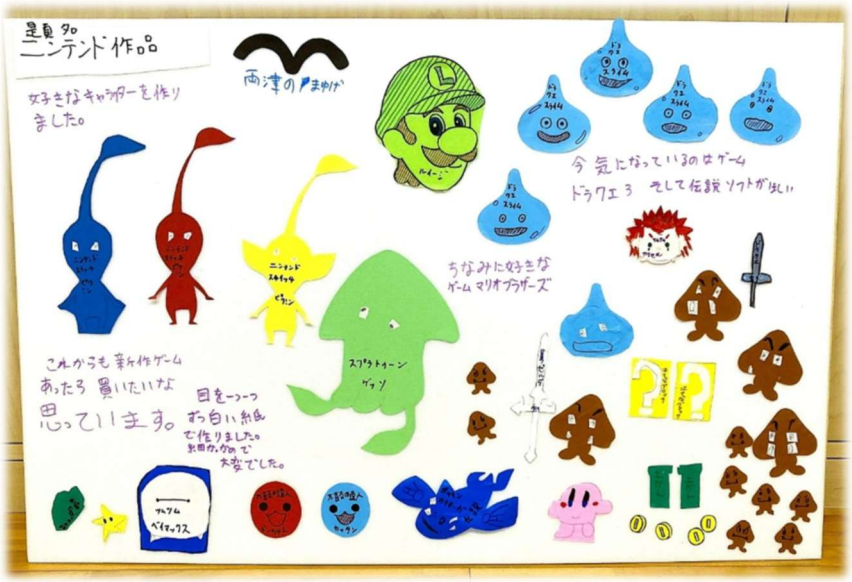
受講者さん達は私達学生スタッフ同様にそれぞれ好きな事、苦手な事、得意な事、感情の表現の仕方、性格があって、一人ひとり異なる個性を持っていると感じました。

私はサポーターとして、受講者さんと信頼関係を築く事を意識しながら、これまで受講者さんが打ち明けて下さった不安に思った事の背景を理解し、配慮出来るように工夫し、ありのままの受講者さんを知る事が出来るように会話する事を心掛けました。

カレッジ長大は障害の有無に関わらず交流し、共に学び合える場である事を、実際に受講者さん達と交流する中で実感する事が出来たと感じています。

（文責　鈴木綾花）

「ニンテンドー作品」



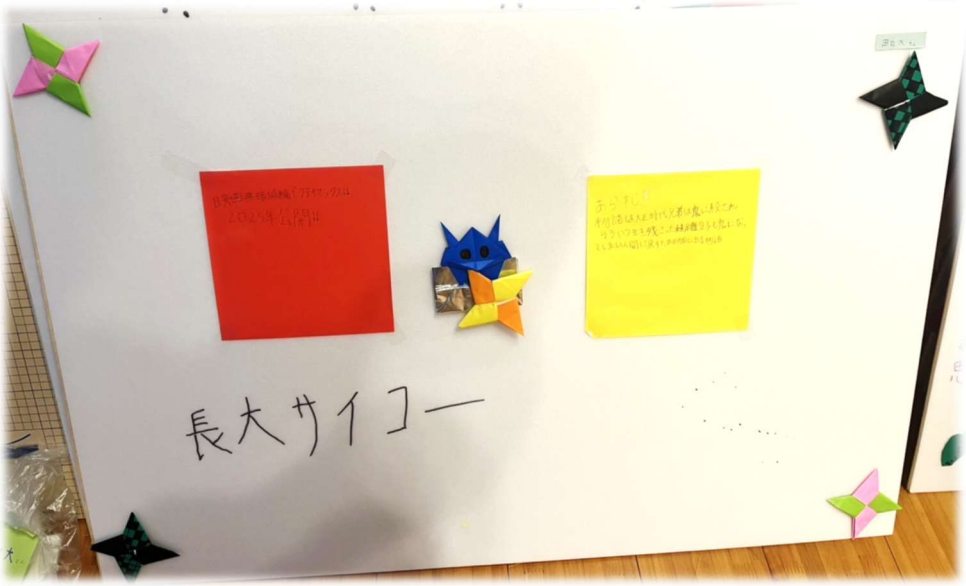
K.T さんのパネル製作のテーマは、ニンテンドー作品です。好きなゲームのキャラクターたちを紙で作りました。目などのパーツを一つひとつ紙を切って作り、それぞれに登場作品とキャラクターの名前を書くなど、細かいところにもこだわっていました。製作するうちにニンテンドー作品以外でも沢山の好きが湧いてきて、カラフルで賑やかなパネルに仕上がりました。

パネル製作の際、作りたいもののイメージにぴったり合うテーマを考えるため、長い時間悩んでいました。また、キャラクターの白色の部分は、白い紙で作ることを徹底していました。どういったところに力を注ぐのかということからも、K.T さんのことが少しずつ見えてきたような気がして嬉しかったです。

今回、カレッジ長大に学生スタッフとして携わらせていただいて、個性を大切にすることの良さを改めて実感できました。活動の間、先生や学生スタッフ、受講者の方々の態度からは、人それぞれの自分らしさがあっていいのだという暖かみを感じました。最後の成果発表が個性あふれる素敵なものになったのは、そういった雰囲気があったからこそだろうと思います。

（文責　中島日織）

「好きなもの」



　T.D さんは、昨年と同様に「鬼滅の刃」をテーマにパネルを作成しました。ただ作品をイメージした手裏剣ではなく、それぞれキャラクターのイメージカラーに沿って折り紙の色を選んでいたり、手裏剣で鬼の首を切っている姿を表現していたりなど、本人のこだわっている部分がとても良く表現されており、T.D さんの「好き」が伝わるパネルに仕上がったと思います。

【制作過程の様子】

私はパネル作成時に参加することが出来なかったのですが、受講者さん同士で協力し合ってお互いの発表を進めていたり、パネルに「長大サイコー」と書いてくださったりなど、受講者さん自身が最初は不安を感じていたにも関わらず積極的に行動したり、活動を楽しんでいた様子が読み取れて嬉しかったです。

【学生スタッフをやってみての感想】

今回初めてカレッジ長大に参加し、分からないことも多い中でどうやって関わっていけばよいのかという悩みが大きくありました。しかし、受講者の方々と何度も関わっていくうちに、心配しすぎずとも受講者さん自身でできることがいくつもあるため、何から何までサポートが必要な訳ではないこと、一緒に楽しんで活動することの大事さに気づきました。何よりお互いが楽しんで全力で取り組むことが、活動を良いものにすることに繋がったのではないかと思います。また、周りのスタッフの動き方や、受講者の方々からから学ぶことがとても多く、自分自身の力不足を痛感しました。今回の貴重な経験を今後にも生かしていきたいです。

（文責　高木美凪）

「未来」

パネルのテーマは「未来」である。

S.S さんはカレッジ長大で受講者やスタッフとの関わりから“それぞれの個性がある”“またカレッジ長大の仲間と集まりたい”と感じたそうだ。その気持ちをパネルで表現した。学校に大好きなものたちとみんなが集まっている。

折り紙で作ったヤッコさんをカレッジ長大に集まった受講者とスタッフに見立てた。ヤッコさんひとつひとつは受講者とスタッフの好きな色で作り、それぞれ表情に違いがあるところはこのパネルのポイントだ。

【制作過程】

テーマがなかなか決まらず、折り紙で手を動かしながらカレッジ長大の思い出について振り返る中で今回のテーマに決まった。

S.S さんはやることが決まってしまえばテキパキと手を動かし折り紙や絵をかいていた。サポーターの私にも一緒に作ろうと声をかけてくださり協力することができた。

行ったサポートとして、S.S さんは何かを決める際、決断がしにくい面があったため、パネルのテーマやテーマに沿って何を作るかの提案を行った。

【参加しての感想】

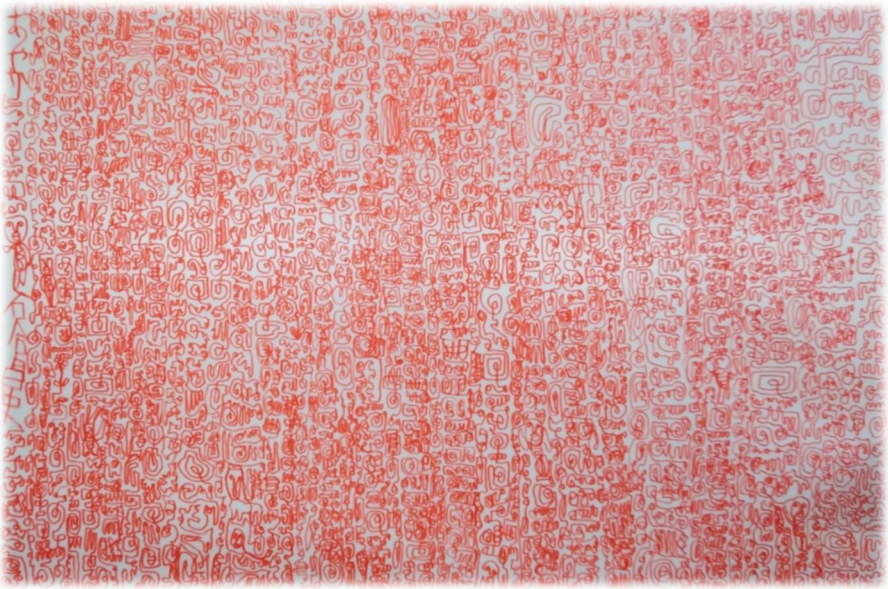
S.S さんのサポーターとして関わり、S.S さんは人と人とのつながりを大切にしていると感じた。毎度のカレッジ長大ではたくさんの人と話している姿があり、その場はいつも明るく笑顔があふれていた。人と人とのつながりを大切にすることで生まれるものがあることを学ぶことができた。

また、受講者のどんな内容であっても一生懸命に取り組む姿勢はとても印象に残っている。内容が難しいと言っていても諦めようとはせず、サポーターの助けを借りながら取り組む姿勢に感銘を受けた。

私自身、サポーターなんてできるのかと不安な気持ちで活動が始まった。しかし、活動を重ねていくたびに受講者との関わりの中で、新たな発見を見出し、たくさんの学びを得ながら成長することができたと感じている。互いに学び合いながら成長することができたカレッジ長大の活動に感謝したい。

（文責　生越愛望）

「私の作品」



この作品はI.Mさんの好きな雰囲気を沢山取り入れたものになっています。この作品のポイントは、一筆書きで書かれているところです。他にも模様の中に人や、花、魚が描かれていたり、大きなぐるぐる模様を入れたりしているところもポイントになっています。

ぜひ皆さんもどのような模様があるか探してみてください！

〇制作過程

最初はどのようなパネルにするか悩んでいましたが、手書きでパネルを作りたいということから一筆書きの作品を作りました。I.M さんは、とても集中してパネル作りを行っており、3 時間ほどで完成させることができました。

この作品はとても I.M さんらしく、遊び心満載の作品になったと思います！作品を作っているときに、大学のことや好きな音楽について話したり、空いている時間には似顔絵を描いてくださったりとても楽しく作品作りを行うことができました。

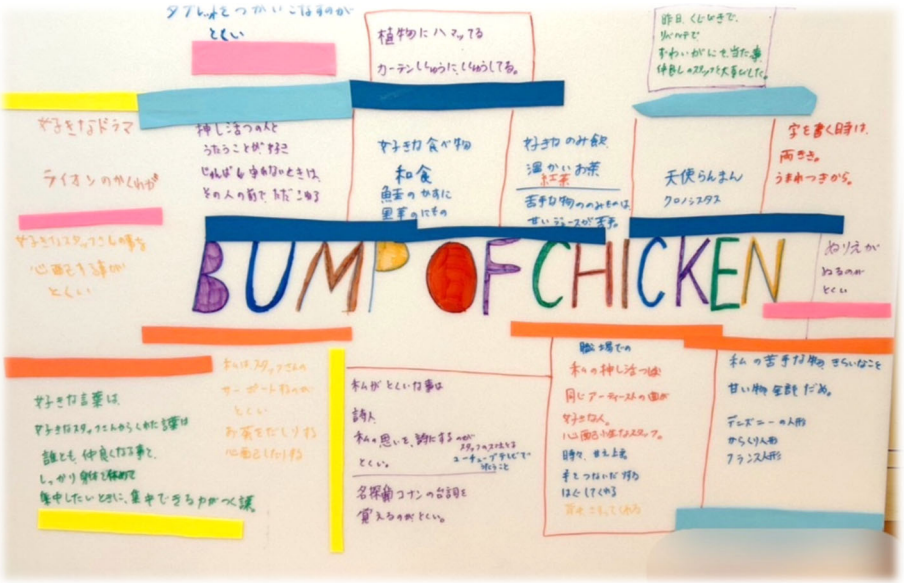
〇スタッフとして参加した感想

私は今回初めて参加させていただきました。最初はとても緊張をしていたのですが、受講者の皆さんやスタッフの皆さんのおかげで楽しく交流をすることができました。

カレッジ長大に参加して、お互いに理解をし、尊重をしあう大切さを改めて実感しました。お互いに尊重し合うことで、カレッジ長大の活動は皆さんの個性が最大限に発揮されたものになったと思います。カレッジ長大は自分自身も成長することができる、とても貴重な経験となりました。

（文責　小野田彩花）

「自分のこと」



パネルのテーマを「自分のこと」と設定し、好きなことや苦手なこと、職場のことなどを表現した。

成果発表会では一人でステージに立ち、受講者自らが考えた原稿をもとに発表をすることができた。

【制作場面】

パネル制作の当初は何を書くか迷っている様子だったが、「自分のこと」というテーマを決めてからはハイペースで作業を進めていた。

折り紙やカラーペンを使ってカラフルに仕上げており、受講者ご本人にとってもお気に入りの作品となった。

【感想】

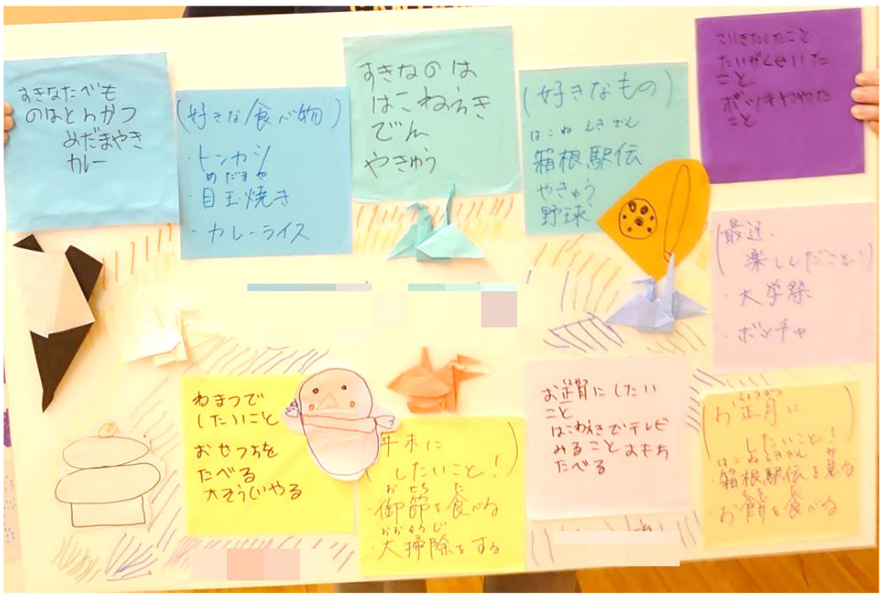
S.A さんは初回プログラムから「成果発表会では一人で発表したい」とお話しされており、積極的に活動に参加してくださった。特に演劇の回では堂々とセリフ読みやダンスをしており、とても楽しんでいただけた。

成果発表会では初回の宣言通り、サポーター係が補助することなく、一人で発表を行うことができた。

S.A さんも私も成長を感じられる日々であり、実りのあるプログラムとなった。

（文責　小林凜）

「私のこと」



＜作品紹介＞

K.H さんのパネル制作では、「好きなこと」「好きな食べ物」「楽しかったこと」「年末にしたいこと」「お正月にしたいこと」というテーマを基に製作した。

発表時には一人での発表に不安があったため、サポーターと共にインタビュー形式で発表を行った。

パネル制作でのポイントは、折り紙や切り絵を使って自分の好きな野球や紙飛行機を表現し、テンションが上がるアイテムを貼り付けることで、視覚的にも楽しく、個性が際立ったところがポイントである。

発表練習の様子

＜パネル製作過程＞

K.H さんは、好きなことや楽しかった思い出が多く、どのようにまとめるか決めかねられていたので、折り紙を使っていくつかの項目を箇条書きにするのはどうかと助言を行った。

作業が進むうちに全体の構成が固まり、最終的には折り紙で鶴や飛行機を作り、カレッジ長大での思い出や好きなものを表現した。

初回のパネル制作に私が参加できなかったため、限られた時間で仕上げることに不安があったが、K.H さんが非常に意欲的に取り組んでくれたおかげで、無事に完成することができた。

＜感想＞

今回が二回目の受講者サポーターだったが、前回と違い受講者の年齢が自分より上だったので、最初はうまく関係を築けるかなど不安なところが多かった。

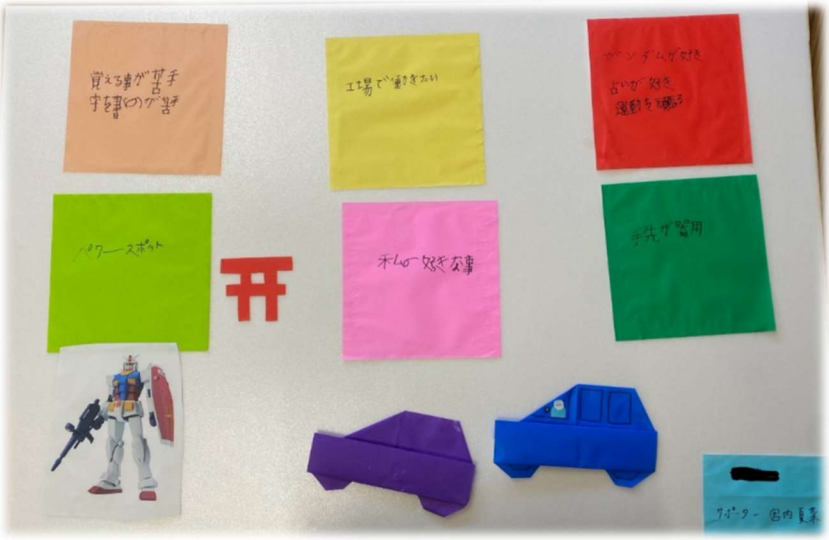
プログラムの初めは、どのように接するのが正解なのか分からず、ぎこちない部分も多かった。しかし、回数を重ねるうちに受講者の方の口数も増え、成果発表会では受講者の素の姿を見ることができたと感じた。

この事業を通して、障害の有無に関わらず「相手と心を通わせること」がいかに大切かを実感する機会になった。

成果発表後の様子

（文責　太田駿）

「私の好きな事」



　好きなことや得意なこと、苦手なことなど、内面が表現できるようなパネルに仕上がった。発表時には、このパネルに加え、受講生 T.T さん自らが撮影した写真をスクリーンに映して発表を行った。T.T さんが最近免許を取られたという車を折り紙で作成したり、神社の鳥居や好きなキャラクターの写真を貼り付けたりしたこともポイントである。

【感想】

事情により事前面談ができず、初回プログラムが始まるまで不安だった。しかし、回を重ねるごとに、T.T さんの興味のあることや、出かけた場所についてお話ししてくださり、毎回お会いするのが楽しみだった。カードを持参してこられて、占いをしてもらったことは思い出の１つである。

今回サポーター係として参加し、T.T さんとの関わりによって、相手の良さを知り、活かしていくことの楽しさを得ることができた。また、支援する/されるといった立場以前に、人間同士、互いに学び合うことがあると感じた。

カレッジ長大の事業がこの先も続いていくことを願っている。

【制作場面】

担当の T.T さんは、自ら考え、何かを作成するということが苦手なようで、テーマがなかなか決まらなかった。そのため、「好きなこと」について作成してみたらどうかと助言をした。

テーマが決まり、折り紙に書いて貼り付けるということが決まると、あっという間に作業を進めていた。一通りパネルが完成すると、好きなことの1つである「パワースポット」に関して、思い出がよみがえったようだった。2回目のパネル作成の回では、T.T さんが訪れたパワースポットである神社の写真をいくつも持ってきてくださり、思い出を共有してくださった。

（文責　宮内夏菜）

「カレッジ長大を通じて見つけた自分」

このパネルは、受講者Ｉさんのカレッジ長大での経験を通じて見えた自分自身やカレッジ長大での活動について表現されている。Ｉさんのお気に入りポイントは2つある。1 つ目は、Ｉさんの好きなものやカレッジ長大での経験を綴っている折り紙の形や配置である。Ｉさんが一人ですべてを考え、納得のいく配置や形にしていた。2つ目は、発表することの選定である。この成果発表会の際に一番苦労したのは、発表内容を具体化し選別することである。Ｉさん自身がどのようなことを発表したいのか、考えを引き出し発表したいことを絞るのに時間をかなり使った。そのため、Ｉさんが観衆に発表したいことをしっかり厳選できた。

【制作過程の様子と行ったサポート】

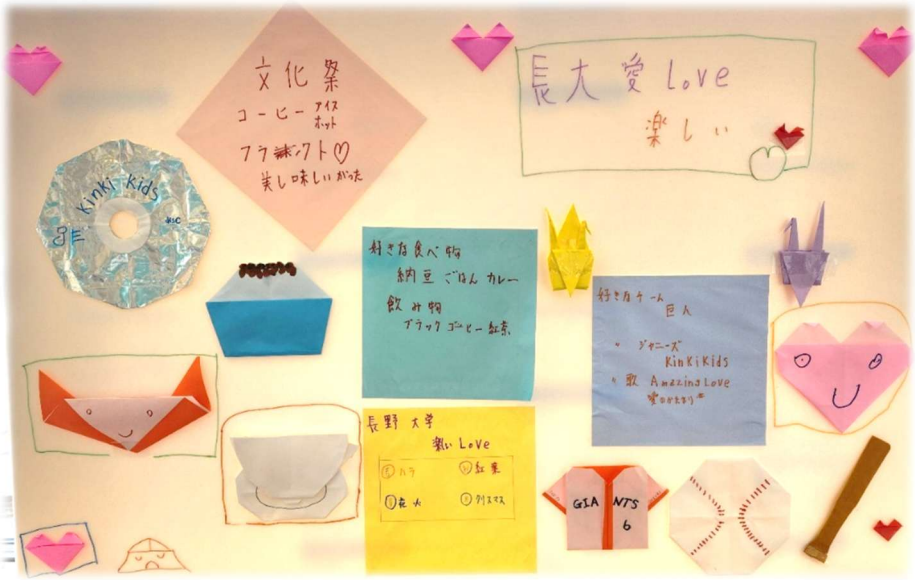
まず、発表内容とパネルの構成を考え、それからパネルの作成に臨んだ。写真はＩさんが自身のパネルに折り紙を貼ったり発表内容を書いたりしている場面である。Ｉさんは考えることを難しいと感じているようだったので、発表したい内容の候補を一緒に考え、Iさんに発表したいテーマを選んでもらった。発表内容が決まったら、Ｉさんにどのようなサポートが必要なのか聞き、必要に応じて折り紙をパネルに貼ったり装飾を折り紙で折ったりした。

【今回スタッフをやってみての感想】

昨年のカレッジ長大への参加で得た経験と反省を活かせば、今年度はスムーズにできるだろうと考えていたが、サポートする受講者が変わるとサポートの手段やタイミングも変える必要があって、Ｉさんにあったサポートの形を見つけるのに苦戦した。障害を持つ方といっても、それぞれ多様な個性を持つ同じ人間なのだということを改めて実感した。この活動を通じて、人と一緒に学ぶことについてじっくり体験でき、人として成長できたと感じる。サポーターとして不足な部分もたくさんあったと思うが、私をサポーターとして一緒に活動してくれたＩさんには感謝の気持ちでいっぱいである。

（文責　藤岡美希）

「好きなこと・楽しいこと」



＜作品紹介＞

Y.T さんは「好きなもの・楽しいもの」をテーマに設定し、作品を制作した。少ない時間の中で、自分の好きなもの・楽しいかったものは何かを見つめなおした。Y.T さんは今までの日常生活の出来事やカレッジ長大での経験を教えてくださった。そろったアイデアを作品として表す際ために私たちは文字と折り紙の両方を使うことを決めた。文字では自分の好きなこと・楽しいことをそれぞれのジャンルごとに分類し分かりやすくなるように配置した。また好きなこと・楽しいことを切り絵や折り紙で表現した。

Y.T さんのお気に入りポイントは２つある。１つ目は「長野大学　楽しい　LOVE」という文字である。納得のできるものができたようで何度もその文字の部分について話してくださった。２ つ目のお気に入りポイントは大好きなプロ野球球団の好きな選手のユニホームを折り紙で作ったところである。他の受講生や家族の方にこの折り紙をアピールしていた。
上記のお気に入りポイントに注目して作品を見て鑑賞していただきたい。

＜制作過程＞

開始直後は作品のアイデアに悩んでいる様子であった。そこでまずは今までの振り返りを行い、アイデアを整理した。アイデアがそろってからは休むことなく集中して取り組まれていた。写真は好きなこと・楽しいことを書き出している様子である。納得がいくまで何度も書き直しを行ったことで満足のいく作品に仕上がった様子であった。また折り紙や切り絵の位置はY.Tさんの意見を反映して配置をした。

＜カレッジ長大でサポート学生を行った感想＞

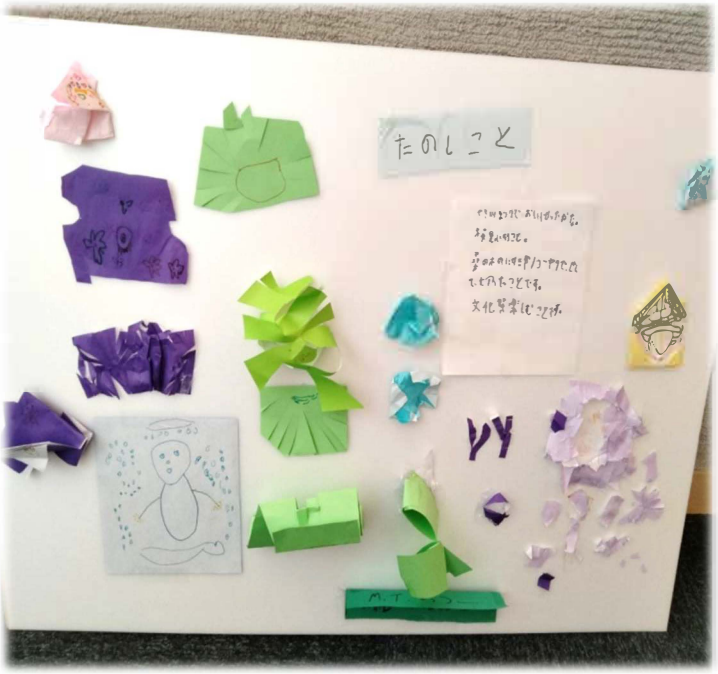
カレッジ長大に参加する前の私の日常生活は学友や先生、アルバイト先の先輩といった限られた登場人物としか関わらない世界にいた。しかしカレッジ長大に参加したことで受講生はもちろん、家族の方、施設の職員さんなど多くの方と関わる機会が生まれたことで自分の中の世界が広がったことを実感した。この経験からカレッジ長大のようなつながりの場の重要性を感じた。自分の視点を広げていくためには新たな世界に飛び込んでいかなくてはならない。その時にカレッジ長大のような自らが主体的に参加できる活動は誰にとっても世界を広げる機会になると考える。

またカレッジ長大のような場は障害の有無や世代をなくして人同士が繋がれる場やともに学べる場となる。このような場は双方を知る機会となり、誰もが暮らしやすい共生社会の一歩となると考える。

今回の経験を今後の人生の礎にしていきたいと強く感じた。

（文責　橋本瑛平）

「楽しいこと」



M.T さんはパネル作りのテーマを「楽しいこと」に設定した。

ちっチッ「楽しいこと」には本プログラム「カレッジ長大」で楽しかったことの他に日常生活や M.T さんの思い出など広い意味で「楽しいこと」が含まれている。

右側上部に貼ってある白い折り紙の中にその具体的な内容を文章で入れて下さった。「カレッジ長大」においては学園祭体験の回を「楽しいこと」として挙げて下さった。

周りの折り紙は楽しそうなイメージの物を表している。落ち葉や花、太陽など自然の事物の他に家や船といった楽しいイメージと結びつけた物を折り紙や厚紙で表現して下さった。

制作過程１　折り紙を器用に切っていく

テーマ決めは難しい。好きな食べ物、・・・などが最初に例として挙げられていたがM.T さんの設定したいテーマではなかったようだ。そこで私はいくつかの例示されていないテーマを提案してみた。その中からM.T さんは「楽しいこと」をテーマに選んでくださった。

そこからは M.T さんの独壇場だ。テーマを決定すれば自ずとイメージが湧き上がり、数々のオリジナリティ溢れる創作物が生まれた。この過程において私は創作物の貼り付け以外のサポートは特に行っていない。左ページの写真にあるパネルはほぼM.T さんが一から作りあげたものだ。

感想

M.T さんは知り合いの受講生さんからの薦めで本プログラムに参加されたということで、本プログラムについてあまり知らない様子であると相談員の方からお聞きしていた。そのため当初 M.T さんが積極的にプログラムに参加して下さるかどうか不安であった。

しかしそのような懸念は不要だったということをこの成果発表パネル作りの中で感じた。M.T さんはテーマに合わせてご自身の「楽しい」イメージを自由に表現されていた。

私はサポーター係という立場で M.T さんと関わったが、M.T さんの感性や自分の個性をのびのびと出す姿勢など M.T さんから学べることが沢山あった。

制作過程２　完成も間近だ！

（文責　大橋温仁）

「私の好きなもの」

受講者の K.Y さんは、このボードのテーマを「私の好きなもの」として制作を進めました。好きな食べ物や季節、動物を折り紙や絵で表現しました。特に食べることが好きな K さんは食べ物の製作に力を入れており、とてもオリジナリティあふれた作品になりました。特にお気に入りなのは左上の猫と文字の装飾だそうです。

【制作過程の様子】

　左の写真は「私の好きなもの」のなかで好きな食べ物の製作をしている様子です。K さんは好きな食べ物がたくさんあり、この写真ではお寿司を作っています。特にサラダ軍艦がお好きだということだったので、Kさんのイメージを細かくお聞きしながら、折り紙と画用紙を使ってお寿司をつくりました。細かい作業が苦手ということだったので、サポーターがお手伝いしながら作り、出来上がったサラダ軍艦を見て「本物みたい！」と喜ばれていました。Kさんは絵を描くことや折り紙が苦手なようで、不安な様子が最初はありましたが、制作していくなかでどんどん楽しくなっていったようで、笑顔がたくさん見られました！

【スタッフとして参加してみて】

　前回のカレッジ長大とは異なり、今回はサポーターとして参加したことで、一人の方と深く関わらせていただき、その方の変化を身近で感じることができました。私の担当させていただいたKさんは自分の意思を話されることが少ない方でしたが、関わっていく中で少しずつ信頼関係を築くことができ、Kさんからたくさん話してくださるようになりました。私自身もそれまでKさんにお話を聞くとき、「これでいいですか」と聞いていましたが、選択肢を提示し「どちらがいいですか」と聞くようにしたことでKさんの思いをそれまで以上にくみ取れるようになりました。

　このような発見はサポーターをしなければわからなかったことです。今回の経験はとても貴重なものになりました。受講者さんにとっても良い思い出になっていればうれしいです。

（文責　小山葵）

「私のすきなもの」

受講者M.Yさんは「私のすきなもの」というテーマで、パネルいっぱいに自分の好きなキャラクターを詰め込んだ作品を制作しました。特に好きな４つのキャラクターのかわいいところも書き込み、Mさんの「すき」の気持ちを表現しています。パネル全体をカラフルにしたのも、ご本人のお気に入りポイントです！

【制作過程の様子】

　左の写真は、「私のすきなもの」というパネルのタイトルを制作しているときの様子です。Mさんが「画用紙でタイトルをつくろう！」と提案し、色とりどりの画用紙で作成しました。Mさんは、手が震えて、はさみをもつことが難しいので、サポーターである私がお手伝いし、協力してMさんの作品作りをしました。

　完成したタイトルを見てMさんも大満足。よりいっそう作品作りに身が入っているご様子でした！

　下の写真は、台本を考えているときの様子です。2 人で一生懸命に言葉を考えました。

【スタッフとして参加してみて】

　今年は、昨年のカレッジ長大とは異なる役割をもち、新たな学びや発見をすることができました。昨年は、受講者の方々と広く浅く関わる形だったのですが、今年はサポーターとして活動し、1 人の受講者の方と深くかかわるという経験をしました。深く関わるからこそ見えることや、関わり続けるからこそ生まれる信頼があることを実感しました。カレッジ長大を通して、私自身も成長していると感じています。私は、人とお話することが好きなので、受講者の方との交流を楽しみながら活動しました。この活動が、少しでも受講者の方の記憶に残ればうれしいです。

（文責　佐度明日菜）

3.受講者の声 カレッジ長大の活動で得られたこと

2024 年度版カレッジ長大プログラムについて、
学生スタッフが受講者に聞きました!

13 名の受講者から回答をいただきました。

充実度や満足度は
どうでしたか?

100 点満点。10 段階評価で 9、10(10 が最大満足)。5 段階評価で 4、5(5 が最大満足)といった数値で評価した受講者もいれば、「楽しかった」「まあまあ」「よかった」「まあ、満足」という形で返してくれた人もいました。概ね、受講者の充実度や満足度につながったプログラムになったのではないかと思います。また、車いすの用意など臨機応変の対応に対する感謝や、最後の発表がうまくできなかったといった個別の振り返りもありました。

「こんなプログラムがあったら
いい!」という問いに対して?

特徴としては、「特になし」が多かったのですが、スポーツのニーズは高く、時間を増やしてほしいとか、新しい種類を追加してほしいという声が大きかったですね。おもしろい回答としては、忍術や英会話を一緒に学んでみたいという声がありました。また、大学でないところに皆で出かけるとか、紙ヒコーキを外で飛ばしたいという希望もありました。

2025 年度もカレッジ長大の活動に参加したいですか？

今回の聞き取りについて、2023 年度からのリピーターが 5 名、2024 年度での初参加が 8 名の人が回答してくれました。 リピーターと初参加者を比較すると、大きな違いが出ました。初参加者は、今は決められないとか悩み中を含め、半数以上の人たちが「未定」に回答しています。一方、リピーターの人たちはカレッジ長大の仲間に会いたいのでという個別の理由を示した人も含め、5 名全員が「2025 年度も参加したい」という回答でした

印象に残っているプログラムは何ですか？

リピーター、初参加に関わらずの一番人気は、「学園祭巡り」でした。 ゲームコーナーで遊んだり、吹奏楽の演奏を聞いたり、買い食いしたりしたことが良かったようです。 学びの集大成としてのパネル作りも中々の好評でした。2023 年度にはなかったパネルの持ち帰り希望もありました。

外部講師にお願いしているスポーツ、演劇体験も支持率が高いですね。

一方、哲学に関しては、難しかったとか、皆で考えた方がやりやすいといった意見に代表されるように一歩引いたプログラムなのかもしれません。

2024 年度には、新規のプログラムを 2 つほど入れました。哲学に分類される「対話型鑑賞」と理科的な学びに位置づけられる「チャレンジド・紙ヒコーキ」です。「対話型鑑賞」では物語づくりに取り組みました。次はもっと長い時間でやりたいという声は予想外でした。「去年とは違う初めての事に挑戦して楽しかった」というリピーターのチャレンジ精神も紹介しておきます。

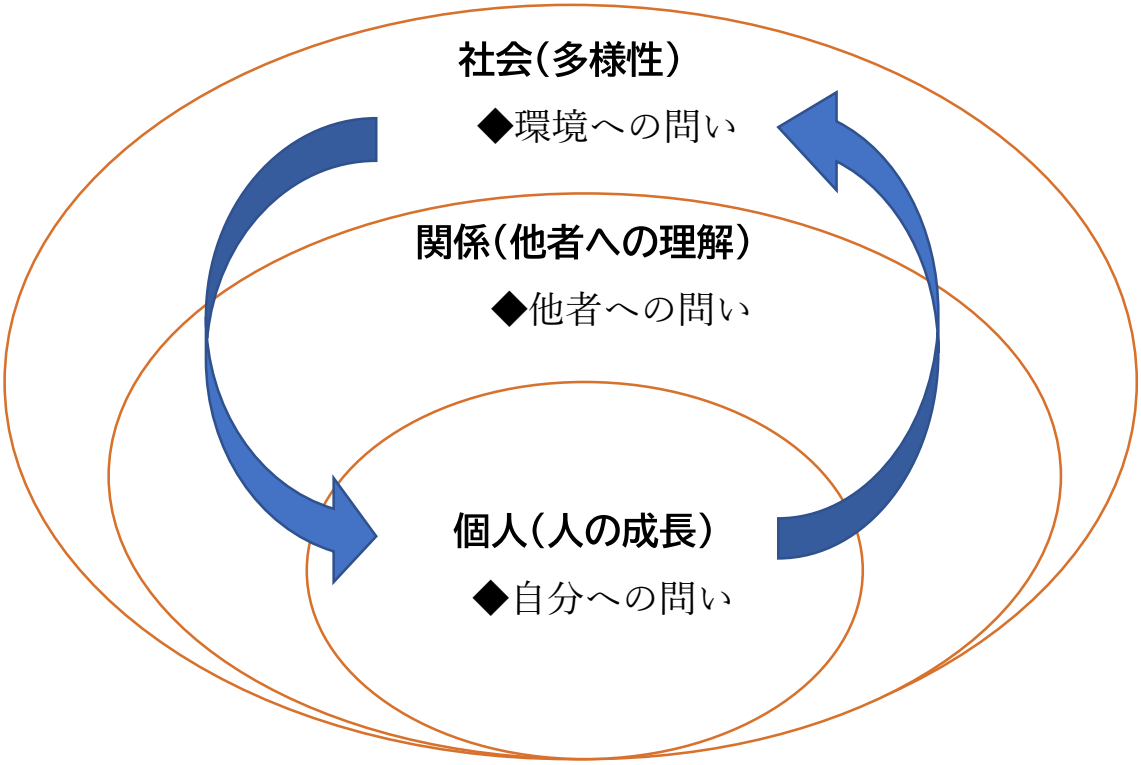
個別のプログラムとは別に普段とは異なる体験ができたとか、友人と活動できて楽しかったとか、新しい受講者とも仲良くしたいとか、その人に幸せ感につながる回答もありました。

4.学生スタッフのことばイメージマップ

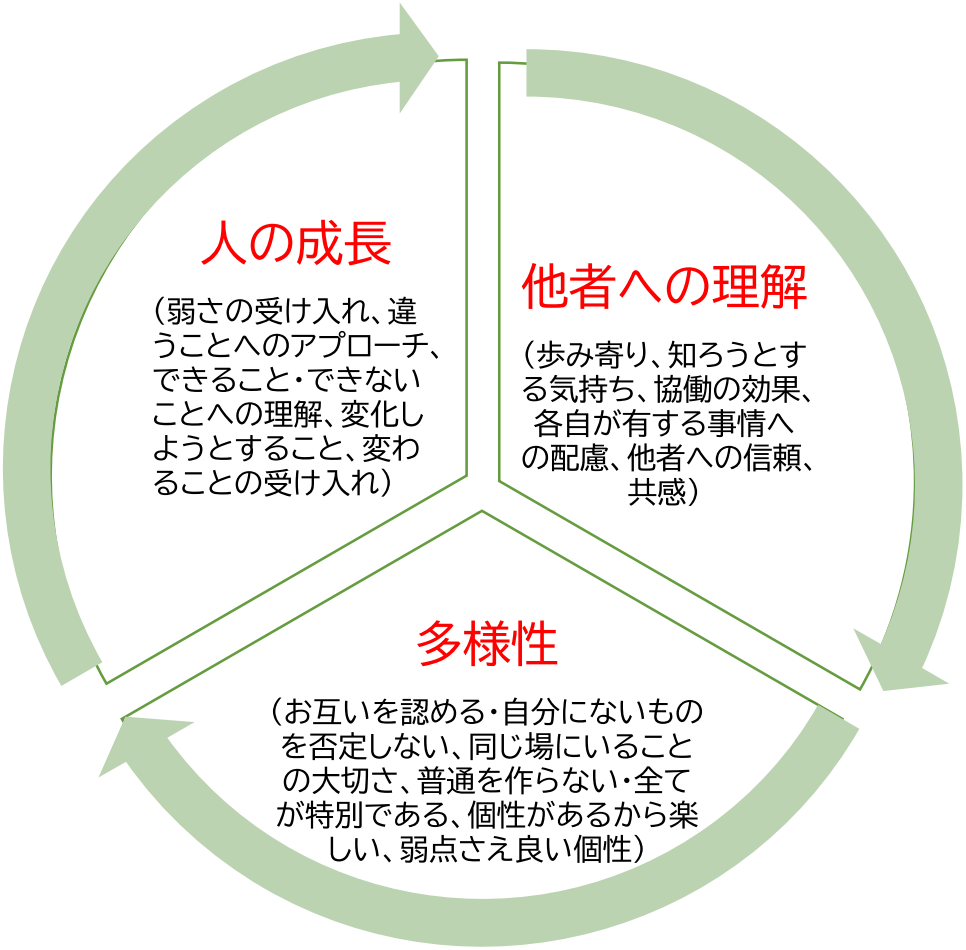
1/9（木）の座談会終了後、「ことばイメージマップ」の時間を設けた。事前に学生達にテーマを提示していて、それを付箋に書いてもらうだけの作業である。テーマは、カレッジ長大の活動を通じて考えた①多様性　②他者への理解　③人の成長である。

【「人の成長」に関して、学生が書いた言葉】

【3つの問いの3層構造】



【3つの問いと学生が付箋に記した言葉のキラリ】



5.学生スタッフの座談会（2025 年１月９日）

～2024 年度カレッジ長大の振り返りとして～

2023 年度に引き続き、小川コーディネーター、三村コーディネーターの進行により、1 年間の総括として座談会を開催しました。16 名の学生スタッフが集まり、意見交換を行いました。以下、同座談会の一部、再現とまとめです。

Q:)コーディネーター　A:)学生スタッフ

① カレッジ長大に参加してどうでしたか？

A：私は、同じ人と長く触れ合うボランティアをする機会がなかったので、今回すごくいい経験になったし、楽しかったです。

A：去年から私は参加しています。去年は統括やって、今年はサポーター係だったんですけど、一人の人と深く関わることができて、また新しい楽しさがありました。

A：去年は受付係で、広く浅く関わる感じでした。今年はサポーターになったことで、一人の人と深く関わることになり、新しい体験に変わりました。楽しかったけど、大変でした。

A：授業の中の障害に関するイメージと実際のギャップを感じていたので、勉強になりました。

A：サポーター係として、関わらせてもらいました。やはり関わっている方と自分が共に成長できるのは、とても楽しく感じました。

【キーワード】

成長、深い関わり、新しい発見

② それぞれ役割がありましたが、役割の中で心がけたこと、工夫したこと、あとどのような点で困ったか教えてください。

A：頭の中では考えているとは思いますが、それを言葉に出しにくい受講者の方でした。自分が言葉を限定して言うと、その方の思考が限定されてしまい、それ以上広がらなかった。もう少し工夫がいるかなと思いました

A：私の担当した人が、じっくり考えるタイプの方でした。何かを決めるとき、考えている時間が長くて、全体の流れから取り残されるみたいなことがありました。早くしないといけないという気持ちと、もっと考えさせてあげたいという気持ちが錯綜しました。私が決めないといけないと思い、「これはどうですか」って提案すると、それがそのまま決まってしまうことになる感じがして。結構悩みました。しかし、最終的には色々な案を出して、その中から決めていただく形にしました。

　あと大勢の場所が苦手な方だったので、第一回目は後ろの方で見るみたいな感じを受けました。去年はあんまりいらっしゃらなかったタイプでした。どのように接すればいいか悩みました。また、足が緊張とか寒さとかで固まる方でした。私が基本的に支えていたんですけど、一人だけで関わるのが、結構きつかった。もっとほかの人に頼ればよかったと思いました。

A：去年はサポーター係だったので、去年のノリと雰囲気でサポートすれば良いのかなと思っていました。しかし、受講者さんが変わると雰囲気もサポートする形も変わるので、試行錯誤しながら、ちょっと苦労しました。

A: やらないといけない、その日の課題みたいなものがある時に、順序立てて伝えるっていうのが、自分の中で上手く出来ませんでした。相手も混乱してしまい、うまく伝わってい

ないっていう感覚がありました。そこが自分の中で課題だなって思いました。

A: 私は最初、関わる方との信頼関係構築するために、結構話そうとしました。しかし、途中からは別に静かな時間に無理やり話す必要はないと思うようになりました。話さない時間もあり、全然気まずい思いもしなかったので、そこは良かったと思います。

A: 質問をして、回答が出てくるまで待つということしました。最初は早く返答が返って来ないと、伝わり方がちょっと良くなかったかなとか色々なことを考えました。質問してからその受講者さんから素直な言葉が出てくるまで待つということは、工夫できた事なのかなと思います。

A: 私が担当した方が、沢山しゃべってくれる方でした。その時の勢いによって、強い発言をしてしまう事がありました。その方にどの塩梅で、「強い発言をしちゃだめだよ」って言っていいのか分からなくて、苦労しました。

A: 私の担当した方が、集団の前だと緊張しやすい方でした。緊張しやすくなるタイミングを教えていただいて、そのタイミングで背中をさすったり、緊張がほぐれるようにしました。第１回目(成果発表をする舞台の見学を行った)の時に、「ステージはなんか怖い」みたいな感じでおっしゃっていたので、一緒にステージに上がったときに怖くない様にする為に、信頼関係を築けるように意識しました。

関わりのポイント)

①人が変われば、サポートの形も変わる。

② 「待つこと、間」の大切さ

③ 自分自身がどの様に変わったか？この活動を通して、昨年度参加した人は昨年度からどう変わったかを教えてください。

A：障害あるなし関係なく関わることができたというのが一つの学びした。

A：最初はすごく緊張していて、積極的にコミュニケーションが取れていませんでした。途中で●●さんから「皆とコミュニケーション取らなきゃ損だよ」と言われました。その後は、積極的に話しかけにいけたことが、変われたところかなって思います。

A: 私は去年記録係として活動していた時、受講者さんに話しかける際に、今話しかけられたら嫌かなとか、聞かれたら嫌かなっていうのばっかり考えていました。しかし、そんなに深く考えなくても、話しかけたら、笑顔で答えてくれたりとか、笑顔で話してくれたり、喜んで教えてくれることが多かった。あまり気にしなくて、フランクに接していけばいいんだなという風に思いました。

A: 実生活で障害のある人と関わりがなくて、事前情報等を通じて、どうしても障害のイメージが先行していました。しかし、受講者と長い時間、関わっていく中で、そういったイメージは変わっていったと思います。

A: 大きく変わったっていうのはそんなにはない。今年はサポーターとしてというよりも、一緒に学ぶという姿勢を大切にできたかなと思います。

A: 最初は、受け入れてもらえるかなという不安がすごく大きかった。いろいろ壁を感じていたのは自分の方で、そのことが相手にも伝わることに気づいた。その後はあまり緊張しないように、変に考えずに素直に楽しくやろうっていう風にした。そうしたら、話しがすごくスムーズに行くようになった。気楽にいこうというのが変わったところかなって思います。

フツーに接するって、

難しいし、奥深いよね～

④ 障害者の生涯学習に関する社会的な意義は何だと思いますか？今回カレッジ長大の様に大学でそれを行う意味というのは何だと思いますか？

A：去年、今年もそうですけど、最初は「発表するのが苦手です」とか、「人前で話せません」とかいう方が、最終的にはああいう大きい発表が出来たりする。このことは、すごく新しい経験だし、その人にとって大きな変化です。ただ事業所に通ってとか施設に行ってというだけでは得られない。カレッジ長大で学ぶことを通じて、自分の中で変化を感じられることに関してはすごく大きい意味があるなって思います。普段いる環境から一歩出るという意味合いで大学に行く、大学が開かれているというのに意味があると思う。

A：カレッジ長大に参加していなかったら、家と事業所だけで、たまに買い物に行ったりとかになると受講者さんがおっしゃっていました。カレッジ長大が生活の中の楽しみになっていたみたいで、最終日の帰る時に、「カレッジ長大が終わって、生活の中の楽しみが終わった、なんか寂しい」とおっしゃっていました。それを聞いてカレッジ長大って、その方の生活の中で結構大きくなっていたんだなと思いました。

A：私が担当した方が、「一番楽しかったのは、物語づくりの時間」っていう風におっしゃっていました。物語づくりは、グループワークの形でやりましたが、グループワークっていうのが重要だと思っています。

　私は障害者の施設でバイトしているんですけど、グループワークという活動はほとんどやっていない。私たちと関わる活動、みんなで考える活動を通じて、カレッジ長大って良いなと思いました。

まとめとして

「体験は生活を豊かにしてくれる」

6.広報関係（大学 HP、報道）

「2024年度カレッジ長大」第1回連携協議会を開催しました

2024年6月6日

長野大学は、前年度に引き続き、文部科学省の令和6年度「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」の委託事業に採択されました。「大学・専門学校等における生涯学習機会創出・運営体制のモデル構築」事業を今年度も「カレッジ長大」の中で進めていきます。
5月28日には、長野大学関係者・上田市・地域の福祉機関・学校関係者で構成される「第1回連携協議会」が開催され、本事業の趣旨や方向性について話し合われました。本年度の実施に向けてプログラム開発、実施スタッフの募集・養成等を行う予定です。

「2024年度カレッジ長大」学生スタッフとの集まり

2024年7月5日

7月1日、2日にこれから約半年間にわたって、「2024年度カレッジ長大」を動かしていく学生スタッフとの集まりを開催しました。2023年12月を最後に半年ぶりに再会するリピーター学生と、1～2年生の初参加学生との初顔合わせの場となりました。
文部科学省の「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」についての情報共有をしたのち、学生スタッフの役割、事前研修、受講者との事前面談など7月28日（日）のプログラム初日までの大まかなスケジュールの確認等を行いました。

共同募金会・全国集会における「カレッジ長大」の実践報告について

2024年7月10日

「じぶんの町を良くする会議 第13回赤い羽根全国ミーティングin信州」が長野市で、7月3日（水）、4日（木）に開催されました。全国から約400名の共同募金運動に直接的・間接的に携わる関係者が集い、地域福祉を推進するための共同募金の役割や可能性について話し合いや交流する場が持たれました。

カレッジ長大については、インクルージョンをキーワードとした「協働の可能性は∞」というテーマの分科会で、カレッジ長大の誕生の経緯、プログラム内容等の説明に加え、事業の持続可能性のためには、財源のことは重要だけど、受講者や学生スタッフが同事業に抱く意識・感情等の要素が大きなポイントになる旨の報告を行ないました。また、分科会参加者と過疎地域での高齢となった障害者支援等についての意見交換も行いました。

分科会 A6 インクルージョン

協働の可能性は∞
～これからの地域課題を解決する
アイデア出しをしよう!!～

【登壇者】福澤　信輔さん　文部科学省　総合教育政策局　男女共同参画共生社会学習・安全課　障害者学習支援推進室
宮本　秀樹さん　長野大学　特任教授
藤井　誠一郎さん　待学園スクオーラ・今人
若者サポートステーション・シナノ　統括コーディネーター
元島　生さん　場作りネット　副理事長
荻原　宏樹さん　上田市共同募金委員会

2024年度「カレッジ長大」第1回（7月28日）、スタート！

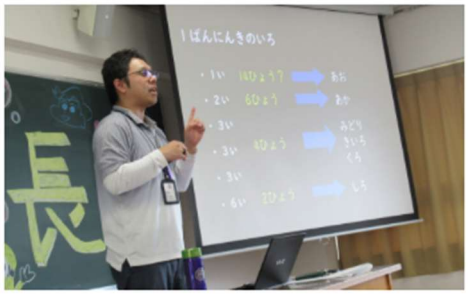
本年度の4月から短い準備期間の中で、本事業に参加する学生が主体となり、第1回目がスタートしました。事前準備では会場装飾やポスター作りに加え、学生一人ひとりが担当の受講者と事前面談を行い、受講者の現在の生活や関心、カレッジ長大に期待することなどを丁寧に聞き取りました。当日は、昨年度よりも多い16名の受講者の方が参加してくださいました。

第1回目は、小林淳一学長より開会の挨拶がなされた後、「①自己紹介カードを作る」「②グループになって自己紹介をする」「③大学キャンパスツアー」「④昼食」「⑤研究について知る」「⑥振り返り」といった、盛りだくさんの活動を行いました。

活動中は、学生と受講者による「会話」が随所に見受けられました。①「自己紹介カードを作る」活動では、指導者の丹野より「どんなカードだったら、相手にインパクトを与えられるか、みなさん(受講者)と学生で話し合あって決めよう」といった投げかけがなされ、学生は事前面談の内容をもとに、それぞれの受講者がどんなことが好きか、どうやったら伝わりやすいかなど様々な工夫をして受講者の方との距離を縮めていきました。初めは緊張していた受講者も、学生の働きかけに応じて色々な自己開示をしたり、時には趣味や関心について雑談をしたり、受講者の方の「学びを通じた人との関係の広がり」を感じる瞬間でした。

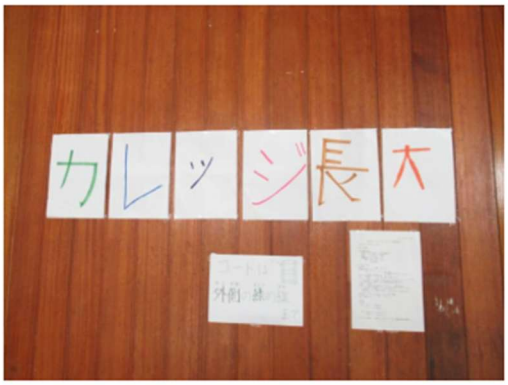
午後の「研究について知る」では、「数字や色といった身近な題材をもとに、この会場でどれが人気だと思う？」という問題提起がされ、予測を立てて、実際に室内にいる人にインタビューするといった具体的な活動を通して、探究的な学びを体感しました。

学生の実際的な学びという意味でも、受講者の余暇という意味でも充実した一日になったようです。



「2024年度カレッジ長大」第2回（9月14日）「ボッチャ」に取り組みました

2024年10月7日



8月31日(土)のプログラムは、台風の影響により残念ながら中止になったものの、今回は「ボッチャ」に取り組みました。「ボッチャ」はジャックボール(目標球)と呼ばれる白いボールに、赤・青のぞれぞれの6球ずつのボールをいかに近づけるかを競うスポーツです。

受講者と学生の混合チームを4つ作り、総当たり戦をしました。初めは、どの程度の力加減でボールを投げたら良いかわからず、遠くに飛ばしすぎてしまうこともありましたが、「あの辺をねらったら？」「こうするといいかな？」など話し合いながら取り組むうちにコツを掴んできた様子。次第に学生や受講者同士でハイタッチをして喜び合う場面も！また、放課後等デイサービスの子ども達の途中参加もありました。

スポーツを通じて雑談したり、冗談を言ったり、喜び合ったり・・・障害のある人もない人も充実した余暇を過ごしました。プログラムで受講者のいきいきとした姿が見られ、準備から受講者への連絡調整まで行ってきた学生たちの喜びもひとしおだったのではないでしょうか。

「2024年度カレッジ長大」第2回連携協議会を開催しました

9月26日(木)に、長野大学関係者・上田市・地域の福祉機関・学校関係者で構成される「第2回連携協議会」を開催しました。

7月28日(日)の開講式を皮切りに2024年度カレッジ長大の実施状況について、写真等を使いながら、情報共有を行いました。併せて、台風接近というニュースのもと、受講者の安全を最優先する観点から8月31日(土)のプログラムについては延期したことや、プログラム実施日と学生達の帰省等とのバッティングにより学生スタッフの確保に難儀したことなどプログラム実施にかかる課題について同協議会で意見交換を行いました。緊急対応、スケジュール管理といった視点から有意義な時を持つことができました。

2024年度「カレッジ長大」第3回（10月5日）

今回は、名倉ゆみこ様（NPO法人いちかわ市民文化ネットワーク副代表理事）、安西真幸様（フリーランス）のお二人を講師としてお招きし、お芝居（パフォーマンス）に関するプログラムを実施しました。

会場に入ると、椅子のみが馬蹄形に並べられたワークショップ形式の雰囲気に少し戸惑いを感じた受講者の方もいたようですが、講師のお二人の明るくコミカルな雰囲気にすぐに惹き込まれていきました。

午前中は、それぞれの自由な表現方法で自己紹介を行ったり、ゲーム的な要素を含んだ発声練習をしたりして、楽しみながらココロを解きほぐしました。
午後は、成果発表に向け、一人ひとりの表現方法に合わせる形で、台詞、演技、ダンスへの挑戦と繰り返し練習を行い、ショート・ミュージカル「Daisuki（だいすき）」に結実させました。
全員、演じる側、観る側の2つのライブ感覚を共時的に体験することとなりました。
参加者それぞれが時空を超えたプレゼントを得たのではないでしょうか。

2024年度「カレッジ長大」第4回（10月19日）

今回は長野大学の学園祭、りんどう祭に参加！

受講者と学生のバディで、パンフレットを見て相談しながら学内を回りました。
学内には、部活やサークル、ゼミなどが運営する様々なイベントや展示、模擬店があり、受講者は興味津々！
各々の関心に応じて、ゲームコーナーに没頭したり、食べ物を購入したり、キャンパスライフを満喫しました。

これまでのプログラムを通じ、学生と受講者の距離は深まり、受講者の緊張した面持ちは消え、今日も随所に笑顔が見られました。

2024年度「カレッジ長大」第5回（11月9日）

哲学カフェ、対話型鑑賞、オープン!

テーマは、≪**ホッとするとき**≫です。受講者、学生スタッフが混ざって、生活体験の棚卸とその共有化を行いました。受講者;「こたつに入っているとき」、学生スタッフ;「先月の給料が振り込まれたとき」が≪**ホッとするとき**≫の一例です。

ドラエモンの一場面を全員で一緒に観て、物語を創りました。近年、美術館等で作品を前にして、自由に語り合うという対話型鑑賞がなされていますが、カレッジ長大では受講者と学生スタッフとが協働して、ストーリーを紡ぐという創造プログラムに挑戦しました。

チャレンジド 紙（かみ）ヒコーキ
～美（うつく）しく遠く（とおく）に飛ば（とば）すために!～

日本には、こんな素敵な記念があります

障害者版STEAMプログラム。学習のねらいは、**①重力、浮力、推力、抗力、時間を科学的に体験する②アソビを通じて、私達の生活空間や時を理解する。**参加メンバーとしては受講者や学生スタッフの他、放課後等デイサービスのお子さん達、受講者宅にホームステイしているイギリス人青年の参加など、総勢45名くらいの【多様性】あふれる世界となりました。

2024年度「カレッジ長大」第6回（11月30日）～成果報告会に向けて～

今回のプログラムは、最終回12月15日（日）の成果報告会に向けて、受講者の方と学生でペアになって準備（パネル作成）をしました。併せて、教室には、2023年度のパネル作品を展示しました。

成果発表のためのテーマは「私」。各々の「好きなこと」や「得意なこと」、「こうなりたい私」。どんな私を、どんなふうに表現するかペアで話し合い、A1サイズの一枚のパネルにデザインします。アイデアをメモに準備してきた方や、「デザインのネタがないんだよなー」とつぶやき、学生と一緒に創り出した方など、取り組みも人それぞれ！

2023年度からのリピーターはさすがです。パネルに貼るものとして、落ち葉や松ぼっくりを持参している受講者もいました。ご本人に聞いてはいませんが、すでにパネルのデザインも頭の中にあるのかもしれません。14日（土）はパネルの完成と発表のためのプレゼンテーション準備が待っています。

12月15日（日）の当日は、本学のリブロホールで受講者の方と学生が協働して発表します！どんな1日になるか、受講者も学生もわくわく、ドキドキですね！

2024年度「カレッジ長大」最終回（12月15日）～走り抜けろ! 成果報告会!～

7月28日(日)からスタートした2024年度版カレッジ長大も最終日の成果発表会と修了式。

2023年度版と異なる点が2点

①発表会の場所

2023年度版は、他のプログラムと同じ場所で発表会を実施しました。しかし、2024年度はリブロホールのステージ上で行いました。7月28日の初日にリブロホールの下見(?)を実施しましたが、実際はどうなるやらでの思いでした。しかし、全員ステージに立って報告しました。受講者の皆さんのお気持ちは、「清水の舞台から飛び降りる」だったのでしょうか?!

②二人発表と一人発表

2023年度に引き続き、パネルを挟んで、受講者と学生スタッフによる協同発表が基本。しかし、2024年度版は、学生スタッフの都合上、受講者の一人発表が生まれました。事前に「一人発表でいい?」と恐るおそる尋ねたら、「昨年やったので、大丈夫!」という力強いお言葉。驚くやら、感動するやら。

See you Next…?

長野大学
イベント情報

発信元：長野大学広報入試担当
〒386-1298
長野県上田市下之郷658-1
TEL:0268-39-0020
FAX:0268-39-0012

2024（令和6）年12月5日

文部科学省事業　障害のある人たちの学び直し「カレッジ長大」の成果発表会・修了式の開催

長野大学では、7/28(日)から学校を卒業した18歳以上の障害のある人たちに向けて学習の場を提供するプログラムを実施してきましたが、12/15(日)で修了となります。

本プログラムは、令和6年度文部科学省の「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」について、本学が「STEAM教育の要素を取り入れた障害者の学び直し(Reskilling)モデルづくりVer.2」というテーマで受託した事業です。

同事業は、2023年度から継続して実施している事業ですが、本年度の受講者は、2023年度の9名から16名と大幅に増えました。半数はリピーターの方です。飛び入りで地域のお子さんやホームステイ中の外国人の参加もありました。

リベラルアーツの観点からスポーツ、演劇、学園祭体験、対話型鑑賞、理科的な学びなどを組み入れた構成にしました。12/15は、パネルを用いて、受講者と学生とが協同で成果発表会を行います。当日は、受講者のご家族や相談支援事業所等の職員の方などもお見えになる予定です。是非取材くださいますようお願いいたします。(成果発表終了後に修了式を開催いたします。)

成果発表会・修了式：令和6年12月15日（日）

◆ 時　間：10時～12時

◆ 場　所：長野大学　リブロホール　　対面形式

この件に関するお問い合わせ先

特任教授　宮本秀樹　　電話：0268-39-0001(代)　　E-mail：　hideki-miyamoto@nagano.ac.jp

文科省事業・カレッジ長大

上田市　長大で成果発表会と修了式　7回でスポーツ・演劇など

上田市下之郷・長野大学が、障がい者の学習のために取り組む『カレッジ長大』令和6年度が修了。成果発表会および修了式が15日、同大リブロホールで開かれた。

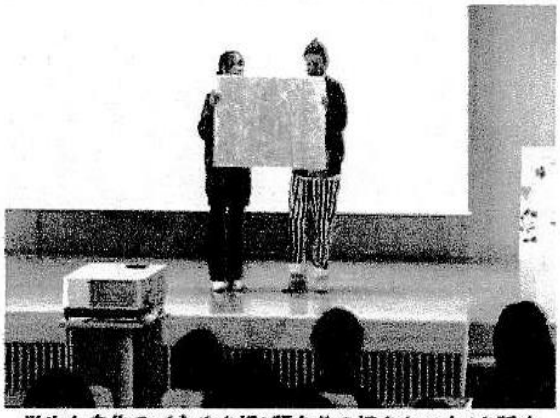
カレッジ長大は、学校を卒業した18歳以上の障がいのある人たちに、学習の場を提供する文部科学省の事業。長野大学は「STEAM教育の要素を取り入れた、障がい者の学び直しモデルづくりVer.2」というテーマで、昨年度から継続して受託している。

本年度の受講者は、昨年度9人から増えて16人。7月から計7回の授業の中に、一般教養の観点からスポーツ（ボッチャ大会）、演劇（ショート・ミュージカルの創作）、学園祭体験、対話型鑑賞、理科的な学び（紙ヒコーキづくり）などを組み入れた。

成果発表は、受講者と学生スタッフによる協働（受講者のひとり発表もあり）で実施。障がい者らは、自分の好きなものなどを色紙や折り紙で表現したパネルを掲げ、自己紹介や好きな推しアイドル、好きな食べ物などを自分の言葉で発表した。なかには、学生のインタビューに答える形式で発表する受講者も。

好きな任天堂のゲームキャラクターを色紙で表現したり、テーマを「明るく楽しい未来」としてカラフルな折り紙で埋め尽くしたパネルを掲げたサンタクロース姿の受講者や、「カレッジ長大は楽しかったです」などの感想を伝える受講者も。16人が終わって、担当の社会福祉学部・宮本秀樹教授は「十人十色のパネル発表ができた」と評価した。

発表後、小林淳一学長は16人の受講生一人ひとりに修了証を授与。「カレッジ長大の最後が舞台の上での発表だったのは素晴らしい」と称え、「舞台の上で話をするのは緊張することと思う。それを乗り越えたことを自信にしてほしい」との言葉を贈った。



学生と自作のパネルを掲げ「自分の好きなこと」を話す受講生（写真右）

7.受講者の家族、事業所ソーシャルワーカーの声

(1)家族の声

「カレッジ長大を受講して」

受講生母（宮原　澄子）

息子が6月頃、カレッジ長大に学校の先輩から誘われたと言ってきました。どんな事をするのと聞いたら良くわからないようでした。

学校を卒業してから勉強のような事は、まったくしていなっかたので大丈夫か心配でした。7月の最初の受講式に出席した時は、かなり緊張していたようです。それでも、玄関の前まで迎えにきてもらい教室まで案内してもらい、一人一人にサポートの学生がついてくれていたので安心したようです。順序たてて話すことが苦手な息子は自己紹介も多分緊張している事もあり上手くは出来なかっただろうと思いました。でも、誘ってくれた先輩も一緒に知っている人も何人かいたので次回からの活動も楽しみにしているようでした。活動内容の日程表をみせてもらうといろんなジャンルの学習がありました。中には「哲学的な会話・理科的な学び」など難しそうな内容もありどんな事をするのか私の方が興味をもってしまいました。

息子は日頃グループホームで生活し週末自宅に帰宅する生活をしています。けれど、長大カレッジに参加する時は生活スタイルも自分で決めグループホームから通っていました。それだけでも、かなりしっかりしたと思います。楽しかったのは、スポーツや学園祭のようでした。大学祭では音楽などを鑑賞したりたこ焼きを買って食べたりとしたそうです。

最後の成果発表会は、私も参加させていただきました。みんな、色とりどりのパネルをつくり好きな物とかを発表していました。大きなパネルを一杯に折り紙やイラストを描いて作るのは大変だったろうと思いました。たくさんの人の前で発表するのもみんな凄いと思いました。サポートしてくれた学生さんもみんな親切で仲良く発表していました。

今回、長大カレッジに参加し沢山の出会いと経験が出来たと思います。サポートしていただいた先生方、学生のみなさん本当にありがとうございました。

「長大カレッジに参加して（させて）」

受講生家族:Y.A

息子（知的障害）のお世話になっている施設からカレッジ長大を紹介され、大学という名前と本人にとってかなり難しそうなプログラム内容に、参加させても続くかどうかという不安を持ちながら1回目の授業（講義？）に出席させるべく大学まで車で送り迎えをしました。その送って行った時の玄関の外にまで出て待っていてくれた学生さんの優しそうな笑顔と迎えに行った時の両手を振り、満足した顔で玄関を出てくる息子の顔を見て一瞬でその不安は消えました。その後も毎回家に帰ってからその日の様子を報告することが日課となっていました。最後の成果発表会は母親とともに見学をさせていただきました。親としてはステージに上がってちゃんとできるのかとドキドキものでしたが、結構そつなく（立派？）にやり通していました。しかし、親として何より嬉しかったことは、その発表後ステージから降りてくる際に担当の先生から、活動中の息子とのやり取りの中でいろいろと話すことがありそのたびに気持ちが癒されたというような紹介があったこと、さらに担当してくださった学生さんから帰り際に、自分も楽しい時間を持てたということを言われたことでした。文字を覚え計算ができるようになることも大切ですが、人との関わり合いの中でいろいろな経験をし嬉しかったこと楽しかったことを共有し、自分の存在を認めてもらえるような場面を多く持たせたいと願っていた親としてはこのような経験をさせていただき、とてもありがたく感謝している次第です。

息子の部屋には、成果発表会で使ったパネルが大事に飾ってあり、家にお客さんが来るたびにそれを持ち出して説明をしています。どうやら来年も参加させてもらうつもりのようです。

最後になりましたが休日を返上してまでお世話していただいた学生の皆さんはじめ先生方学校関係者の皆様に心から御礼申し上げます。

（2）事業所ソーシャルワーカーの声

「学ぶ姿勢から得た気づき」

就労継続支援 B 型事業所そえる 代表理事菊地久美子

S さんが通所している 就労継続支援 B 型事業所そえる 代表理事菊地久美子です。この度は学びの機会をつくってくださりありがとうございます。

昨年に引き続き、今年もカレッジ長大に通わせていただいていたと S さんを間近で見てきま

した。昨年は初めての大学ということで少し緊張気味な S さんでしたが、今年は昨年と違い緊張や不安はほとんどなく、楽しみやわくわくでいっぱいでした。

私たち職員は「カレッジ長大でどんな事を学んできたの？どんな学生さんと関わらせてもらったの？」と S さんにお話を聞くことが楽しみになっていました。S さんは「折り紙をやったりしたよ。そして学生さんにそえる café のチラシも配ってきたよ、今度来てくれるって」ととても嬉しそうに話しをしてくれました。週末を楽しみにしているんだなという事がひしひしと伝わってきました。

そして12月15日（日）に開催された成果発表会に参加させていただき、私は涙があふれました。色とりどりの折り紙を使い「これは十人十色です。このように様々な色があるように、人も色んな人がいてその色んな人の個性を活かしていくことが良いと思います」と発表をしていました。私はこの成果発表会で忘れかけていた大切なことを思い出すことができました。一人一人顔も違えば性格も違う。その一人一人の個性を活かせる社会をつくっていくことが私たちの責務なんだという初心に帰ることができました。

カレッジ長大で学び成長をした S さんに負けないように、私たちも学び続けていく努力をしようと思いました。学びの機会を作ってくださり、力になっていただいた皆様に心から感謝いたします。引き続き今後ともよろしくお願いいたします

「僕は大学生になります！」

上小圏域基幹相談支援センター
主任相談支援専門員　土屋可奈子

「僕は大学生になります！」カレッジ長大を紹介させていただいた受講者の言葉です。とかく、我々“支援者”と呼ばれる立場の人間は、「イベント」というイメージを持ちがちかと思いますが、受講者の皆さんの想いは異なっていたようです。そして、その想いを受け止め、受講者に対し、交通手段の利用の仕方を共に練習をしたり、送り迎えをしてくださったご家族や支援者の皆さまのご協力に感謝いたします。令和５年度から実施された本事業に対し、私たち上小圏域障害者総合支援センターは地域で生活されている障がいをお持ちの方々に広報し、参加を募る役割を主に担ってまいりました。昨年より今年、多くの希望者を紹介させていただけたと存じます。印象的だったことは、受講者の方の積極性でした。幼いころに出会い、応援させていただいた方々が歳を重ね、様々な経験を経て成長され、大勢参加されていたことに、とても暖かい気持ちになりました。皆が生き生きと夢を語り、好きな物を共有し、緊張を抱きつつも立派に成果発

表をされていた姿には大きな感動を覚えました。

「学ぶ」ことは誰もが有する権利です。しかし、現実には厳しい状況も多く存在します。限られた資源や環境の中でのみ過ごさざるを得ない状況を脱し、地域に溶け込み、共に学び合う、その機会が当たり前のこととして根付くよう、そのきっかけとして、この事業は継続していただけることを望みます。また多くの学生がこの経験を宝物とし、障がいがあっても、なくても、共に生きる地域を一緒に作っていく「仲間」となっていただけることを期待します。

「社会福祉以外の学生も参加してください！」

連携協議会委員　萱津公子

「カレッジ長大」が 2 年目を迎えました。受講生募集前は、昨年に引き続きリピーターとして参加してくださる方がいるのかしらとか、サポーターの学生が集まるだろうかとの不安がありました。

ところが、昨年の受講者が知り合いに声を掛けてくださって一緒に参加してくれたり、昨年の学生サポーターが再度参加してくれたりと嬉しい意外な結果になりました。

養護学校等を卒業し社会に出た障がい当事者が、家と就労先だけを行き来するだけでなく、学び直しや新しい活動の場、そして新しいコミュニケーション相手がいる第三の居場所を求めていたことが、はっきりわかりました。2024 年度は、障がい者対応型の STEAM 教育の要素を取り入れ、特にカラダ・ココロ・クラシの『A』に重点を置き楽しみながら行うことができました。最初は、ペアを組んだ学生となかなか上手くコミュニケーションが取れなかった受講生が、サポーターの学生とともに報告会のプレゼンテーションを行って、成果を発表しました。その様子は、昨年度と同様に拝聴する私たちに感動を与えてくれました。

また、主なサポーターである社会福祉学部の学生は、講義等でインクルーシブ社会や地域共生社会、多様性等について学んでいるのですが、学生が自分から求めてボランティアサークルや障がい関係の事業所でのアルバイト、資格取得のための実習の場を経験しないと、身近なところで障がい者と自然に交流する経験が少なくなっています。「カレッジ長大」での経験は学生たちにとっても、障がい当事者理解や彼らが置かれている社会の実情を知る機会とともに、人はいくつになっても人間として成長し続けるということ、サポートしていたつもりが、彼らを通して学生自身が成長させられているという良循環が働いていることを感じます。

3 年目があるとしたら、他学部の学生にも是非参加してほしいプログラムであると思っています。

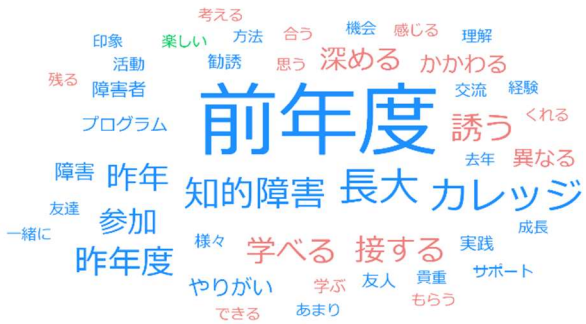
8.カレッジ長大 学生スタッフアンケート集計結果

調査方法:WEB 調査(Google Forms)
調査期間:2024 年 12 月 17 日～12 月 26 日
対象者:カレッジ長大スタッフ 22 名(長野大学学部生)
回答者:18 名
回答率:81.8%
集計方法 : 単純集計、(テキストマイニングによる分析)

1. この活動に参加しようと思ったきっかけを教えてください。

18 件の回答を要約

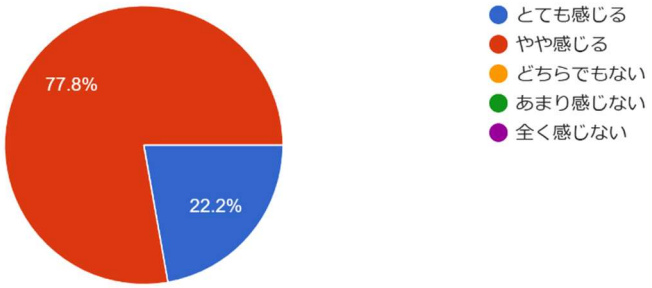
- 障害のある方と接する貴重な機会だと思ったため。
- 障害のある方と一緒に成長し、サポート方法を学べると感じたため。
- 友達に誘われたため。
- 昨年も参加し、また参加したいと思ったため。
- 知的障害の方と交流した経験がなく、共に学びたいと思ったため。
- 障害者の方とかかわる機会が少なく、理解を深めたいと思ったため。
- 前年度参加して楽しかったため、異なる係もやってみたいと思ったため。
- 昨年度参加してやりがいを感じたため。
- 友人に勧誘されたため。
- 昨年も参加し、とても印象に残ったため。



テキストマイニング
※スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示しています。 単語の色は品詞の種類で異なっており、青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞・形容動詞、灰色が感動詞を表しています。

2-1.この活動に参加に参加して障害者への理解が深まりましたか

18 件の回答



2-2.上記記の回答の理由について、具体的に記載してください

18 件の回答をラベルごとに集約

- 信頼関係の構築
  - 受講者の方とたくさんお話しすることで信頼関係の構築が経験できたため。
  - 密接に会話をしている事が多かったため、全員と平等に関われたわけではない。
  - 偏見の解消
  - 実際に関わることで無意識に持っていた偏見が無くなったように感じる。
  - 障害者に対して、障害があるという一面だけで捉えてしまうことがあったが、実際にはその人の個性や生活背景、価値観といった多様な側面があることに気付いた。
  - 障害というのはその人の個性であり、障害の有無は関係ないということを実際に体感することができた。
- 理解の深化
  - それぞれの特性について、関わりを通じて理解が深まったため。
  - 普段関わることがない人と、カレッジ長大を通して関わることで理解が深まった。
  - 授業では学ぶことのでないこと(コミュニケーションの取り方、特性による行動など)を学ぶことができた。
  - 授業などで学んだことを実際に直接関わっていくなかでアップデートすることに繋がった。
  - 多数の人と関わることでその人の特性などを理解することに繋がった。
- 実践的な理解
  - 一概に障害者といっても、人によって十人十色であり、どんなふうに物事を感じられ、どのようなサポートが必要なのか実践的に理解できた。
  - 障害があることでどのようなことが出来て、どのようなことが出来ないのか、また、人によって、障害によってできることが変わってくるとわかった。
  - さまざまな症状を持った方々とかかわる中で、以前より対応ができるようになった。

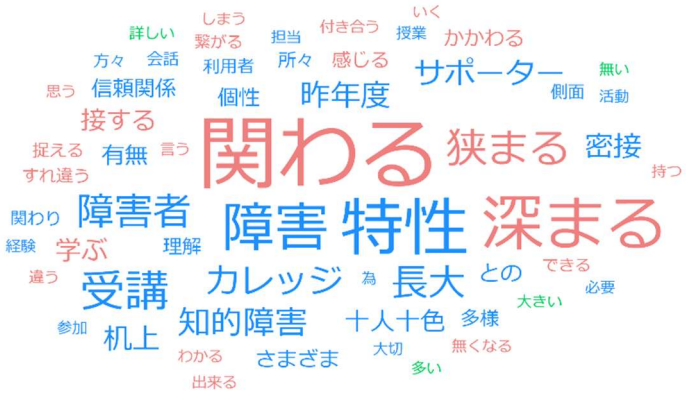
- 実際に関わることでわかることがありました。
- 実際に利用者との会話の中でそう感じたから。

● 個性の再認識

- 障害の有無な障害特性ではなく個性をみていくことが大切だと再認識した。
- 昨年度担当した方とは違う性格の方を担当した。

● その他

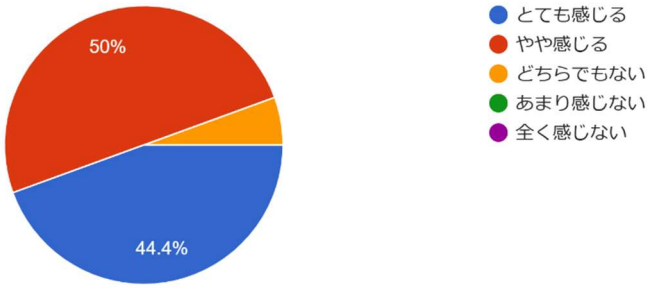
- サポーター係ではないため個人の障害特性までは詳しくわかっていない。
- 知的障害があるというだけで、将来の選択肢が狭まってしまうと感じた。
- 所々配慮が必要な場面はあれども、我々と同じ人間だなと改めて感じた。
- 参加する前は、障害者という名前で見てしまっている節があったが、活動に参加し受講者の方々と接する中で、様々な気づきがあった。
- 言葉で聞いても実感がなかった「そもそもいわゆる『普通の人』とどういう違いがあるのか」を感覚的に少し理解できた。



※スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示しています。 単語の色は品詞の種類で異なっており、青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞・形容動詞、灰色が感動詞を表しています。

3-1.この活動に参加して自身が成長したと感じますか

18 件の回答



3-2.上記記の回答の理由について、具体的に記載してください

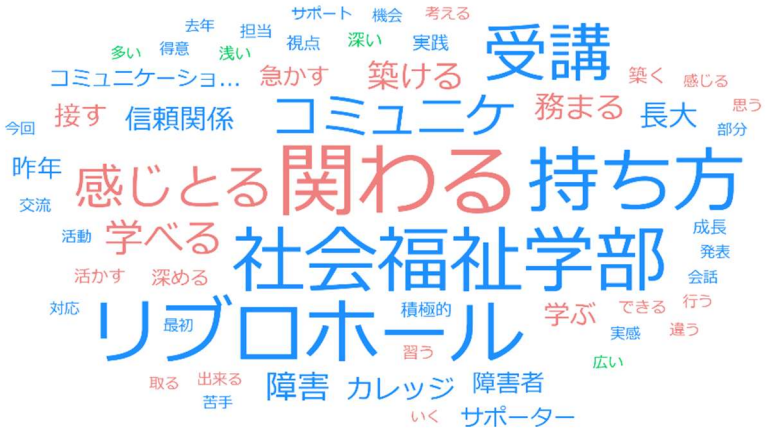
18 件の回答をラベルごとに集約

- コミュニケーションの向上
  - 自分から積極的に話しかけられるようになった。また、相手の答えを急かさずに待つことを学んだため。
  - 障害のある方とのコミュニケーションを実践的に学びました。
  - 昨年は少し障害者と関わることに緊張や恐怖を感じていたが、今年は積極的にコミュニケーションを取ることができた。
- サポート方法の理解と実践
  - 昨年にも増して、人に合わせたサポートの方法が理解でき実践できたし、視野の広がり・知見の深掘りがあった。
  - 受講生の苦手な部分を感じとり、どうサポートするか、また、得意な部分をどう活かしていくのか常に考えながら行った。
  - 障害者への対応を何となくわかっていたつもりだったが、実際に接してみて、そんな簡単な話じゃないと分かり、障害の人との接し方を学べたから。
- 障害への理解の深化
  - 今まで障害を持つ方と関わる機会がなかったが、今回の活動から障害への考えの持ち方やコミュニケーションの取り方などを学べたと思う。
  - 障害者に対する考え方を深められたから。
  - 障害の有無に関係なくひとりの人として関わることが大切で、そのように考えることでよりその人の個性や良さが見えてくることを学んだ。
- 信頼関係の構築
  - 社会福祉学部の授業でクライエントとの信頼関係を築くことを習い、実際に受講者さんのサポーターとして活動することで信頼関係が築けた。
  - 長期間にわたり関わったことで失敗や課題に対して試行錯誤する機会が多くあり、日々の成長を実感できた。
- 適応力の向上
  - 計画通りにいかないことがあったが、そういったときに対応できる適応力が身についた。
  - 哲学の回では、自分たちで進行する機会があり、問題の出題や司会を行うことが出来たから。
- 個別の成長
  - 昨年は雑用的な役割だったが、今回はサポーターとして 1 人と深く関わり、新たなことを学ぶことができた。
  - 昨年度よりは担当する方との関わり方を考えた。最初は担当する方と出来るだけ会話したいと考えたが、話すことだけがコミュニケーションではないと気付けた。
  - 2-2 で書いたように、実感として知れたことがいくつもあり、その視点を得られたという

点で成長できた。

- その他

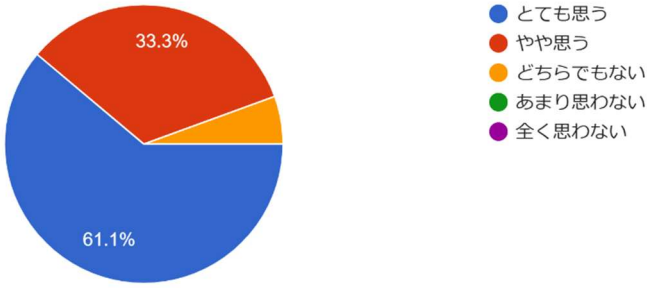
- 去年となんら変わりないプログラムでただ参加者が増えたので去年より成長は感じられていないように思う。
- 学年の違う学生とも交流することができた。



※スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示しています。単語の色は品詞の種類で異なっており、青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞・形容動詞、灰色が感動詞を表しています。

4-1.この活動は、大学として継続したほうがよいと考えますか

18 件の回答



4-2.上記記の回答の理由について、具体的に記載してください

18 件の回答をラベルごとに集約

- 受講者と学生の成長

- 受講者とスタッフ共に成長できるものであるため。
- 福祉学生にとっては障害者の学びのサポートを通じて実習の練習になるし、他学部の学生でも福祉のボランティアが身近かつ実践的にできる。
- 学生も成長できるし障害のある方も大学で様々な学びができるので続ける価値はある。
- 受講者が大学のことについて体験してもらうのと同時に、大学生も実践的な学びになるため続けた方がよいと感じた。

- 学生、受講者ともに学びを継続していった方が良いし、今回築けた関係を継続したいから。
- 学生としても成長できる活動であるため継続するべきだと考えます。
- 学生の学びにもつながるし、大学のアピールポイントにもなるので続けてもいいと思う。

● 貴重な経験と機会

- 受講者も普段関わることがあまりない学生と関わることができ、学生も障害のある方と関わることができる貴重な機会だから。
- 障害者と関われる機会そのものが貴重であるため、大学生がそうした経験ができる場はあった方がよいと思うから。
- 外部の方とかかわる機会を作れることは大学の魅力だと思うから。

● 継続の重要性

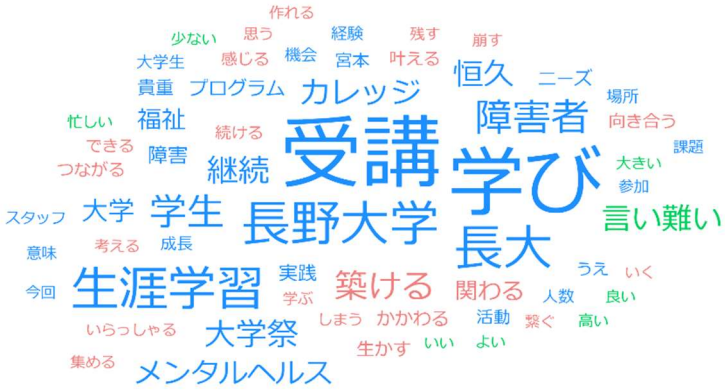
- 本プログラムの最終的な目標は障害者の生涯学習を推進することであるため、恒久的に継続することが重要だ。
- 大学という場を生かして、人と人が繋がれる場所として残していく必要があると考える。
- 障害者の方の学びの機会としても、学生の貴重な経験としても、継続できるのであればしていただけるといいなと思っています。
- 受講生がまた参加したいと言っていたり、大学祭などの大学ならではの行事を楽しんだりしていてニーズがあると感じたから。
- 学生にとっても、利用者にとってもいい学びの場であるから。

● 大学の魅力とアピール

- 大学に行ってみたいという願望を叶えられる素敵な場所だと思うから。
- カレッジ長大の活動を知って長大に進学したいという後輩も出てくるかもしれないから。
- 大学のアピールポイントにもなるので続けてもいいと思う。

● 課題と改善点

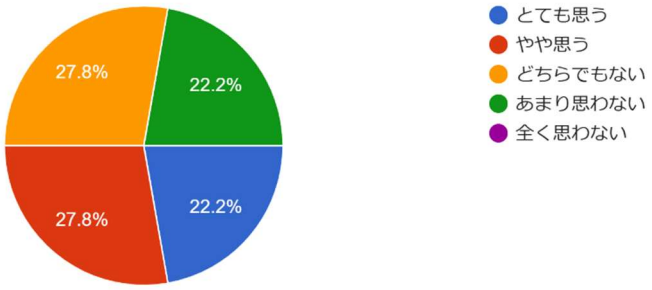
- サポーター学生が忙しい部分が不満だが、それ以外は良い経験になるのでぜひやるべきだと思うから。
- 学生スタッフの人数についてはしっかりと集めたうえで開催したほうが良いと思う。今回は人数が少ないうえに参加率もそこまで高くなかったため、負担が大きかった。
- 先生が提案していたようなものだったら正直やっていいと思う！とは言い難い。



※スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示しています。 単語の色は品詞の種類で異なっており、青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞・形容動詞、灰色が感動詞を表しています。

5-1.この活動が続く場合、また参加を希望しますか

18 件の回答



5-2. 上記記の回答の理由について、具体的に記載してください

18 件の回答をラベルごとに集約

- 継続の意欲
  - 受講者さんとカレッジ長大の場で会うのが約束というか慣習になってるし、このボランティアの経験は人生の宝物になるのでまたやりたい。
  - 予定の都合が合えばまた参加してみたい。
  - 初年度から規模も大きくなっていて楽しみ。受講生とのつながりを大切にしたい。
  - 学生、受講者ともに学びを継続していった方が良いし、今回築けた関係を継続したいから。今年度の活動の中で、自分なりの課題を見つけた為、その課題にこれからも向き合っていきたいから。
  - 今年度も昨年度同様やりがいを感じることができた。リピーター―学生としての経験を生かし、より積極的にプログラム運用に関与してみたい。
  - 出来れば参加したいと思っています。
  - 楽しかったから。
- 忙しさと負担

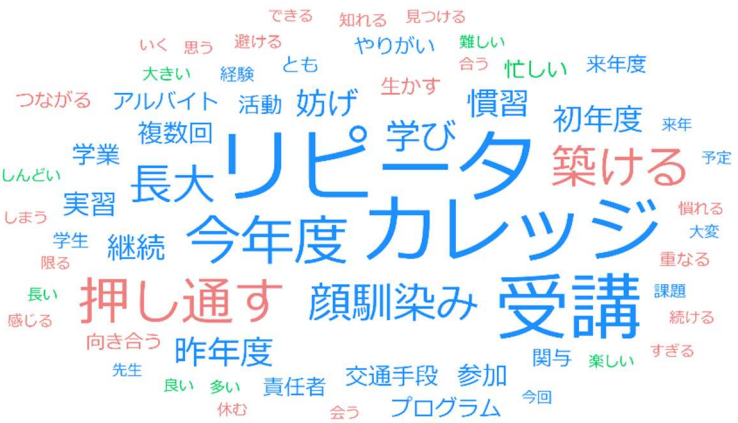
- 活動に参加したことで良い経験ができたため、来年度も参加すれば学びにつながるとは思うが、今年度よりも忙しい中で活動に参加できるか自信がないため。
- 忙しくなるので、参加が難しいから。
- 学校の勉強やアルバイトとの両立が難しいため。
- 来年実習がありより忙しくなると考えると負担が大きく参加しないかも知れません。
- 自身の予定と合わないことが多く、迷惑をかけることが多いと思ったから。
- 来年は実習があるので、実習の妨げになるのではないかと不安であるため。
- 続けたいがスケジュール的によく分からないため。
- 楽しくて達成感もあったが、プログラムが複数回あり、参加するのが大変。今年度も何回か休んでしまった。
- 1 日の活動時間が長かったので学業やアルバイトに影響したことがあったから。
- 忙しいというのが大きな理由。事前面談も交通手段や時間が限られた中で行うしかなく、その他のやらなければならないことと重なるとかなりしんどかった。ほかにも、カレッジ中に心身ともにかなり疲弊してしまったことから継続は悩み中である。

● 継続の意義

- 学生、受講者ともに学びを継続していった方が良いし、今回築けた関係を継続したいから。
- 大学という場所で行うことにも意味があるのではないかと感じました。
- 学生にとっても、利用者にとってもいい学びの場であるから。

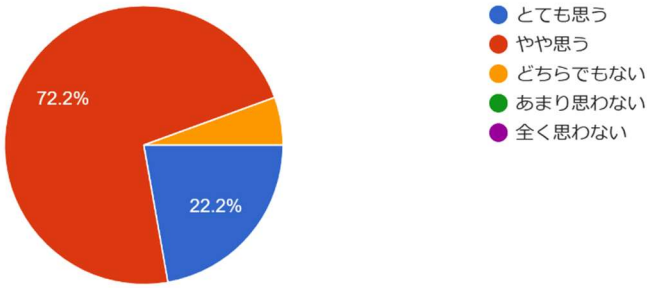
● 改善点と課題

- 継続して参加する受講者との距離が近くなりすぎたり、顔馴染みの集まりといった雰囲気になったりすることを避けたい。
- 活動は楽しかったため参加したいと思う。しかし、スタッフが 2 年目であることからくる慣れや人数の増加によって大学生が自由になりすぎてるところや、先生 vs 学生のような準備段階のやりとりがとても退屈です。責任者として先生の意見を多少強引でも押し通すことはあっても良いのではないかと思いました。



※スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示しています。 単語の色は品詞の種類で異なっており、青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞・形容動詞、灰色が感動詞を表しています。

6-1.この活動は全体的に満足できるものでしたか
18 件の回答



6-2. 上記記の回答の理由について、具体的に記載してください
18 件の回答をラベルごとに集約

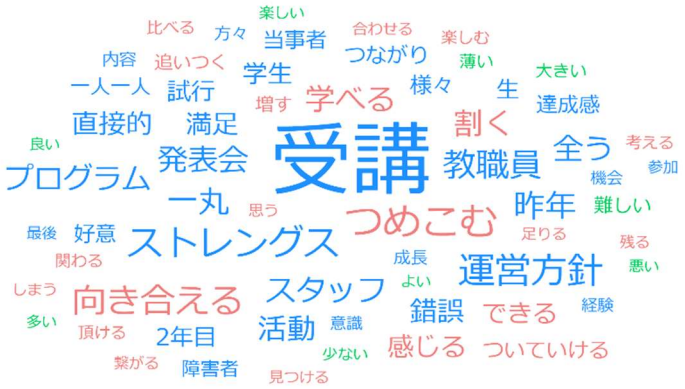
- 達成感と成長
  - 活動に参加した時は自分の役割を全うするために積極的に行動できたし、受講者や他のスタッフとのつながりができたのも楽しかったため。
  - 難しいこともあったが、最終的には達成感のあるものになったから。
  - 最後の発表会が終わった際の達成感が大きかったから。
  - 障害について直接的な関りにより知る機会になったことや自分を成長させる機会になったから。
  - 最後の発表会を見て皆様とても成長しているのだと感じて、成果を目で見ることができました。
  - 普段の大学生活では、経験できないようなことを体験できたから。
  - とてもいい経験になった気がします。
- プログラムの充実
  - 昨年にも増して色んなプログラムを試行錯誤しながら活動できたのが良かった。
  - 考えることが難しい内容もあったが、私自身も楽しく活動を行うことができた。
  - 様々なプログラムを通して、様々な力を身につける事、受講者のストレングスを見つける事に繋がっていると感じたら。
  - 障害者の方と一緒に楽しんで学べたから。
- 改善点と課題
  - 受講生に対して学生サポーターが少ないと思ったのでそこは改善すべきだと思ったから。
  - 全体的にはとても良いものであったと思います。ただ、学生スタッフが足りなかったのではないかと感じました。特に夏休み期間の活動は学生スタッフの集まりが悪く、ひとりの生徒への負担が大きくなってしまっていました。
  - 内容をつめこみすぎてついていけない・ペースに合わせられない受講者もいて、スタッフとして何とか追いつかせようとすることが難しかったし、受講者一人一人に時間を割くこ

とができないので、昨年よりも丁寧に向き合えなかった気がする。

- 内容には満足できても運営方針には疑問が残るため。
- 意味のある活動であるため、意欲はあったが、それが全体の意識としては薄かったと感じる。昨年と比べてしまうのは良くないかもしれないが、昨年は全員でもっと受講者さんや企画について考えて一丸となっていたように感じる。スタッフ間の意識の違いというところから少し満足できなかった部分がある。

● 受講者の反応

- 受講生、学生、教職員の皆さんの笑顔がたくさんみられたから。
- 受講生の方々からは好意的な声を多く頂いている。スタッフの私としては、受講生の方々に楽しんで頂けたようなので満足である。
- 受講者さんの発表を聞く中でやってよかったという場面も見られたことからそういったところは満足している。



※スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示しています。 単語の色は品詞の種類で異なっており、青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞・形容動詞、灰色が感動詞を表しています。

7-1.この活動の次年度へ向けた改善点を教えてください

18 件の回答をラベルごとに集約

● スタッフの意識と参加率

- 打ち合わせや事前準備への参加率の低さや遅刻の多さを改善するべきだと思います。日程調整や、スタッフ一人一人の意識改善をさらに行うべきだと思います。
- モチベーションのある学生の確保。ボランティアの延長として説明するのではなく、大学と契約して事業スタッフとして動くことを説明する必要がある。
- 集まる時間を、細かい打ち合わせがある場合、会場設営のみの場合とで変えた方がいい。
- 準備期間をもう少しゆとりをもって設定する。受講者を増やすのであればスタッフがしっかり集められた状態で。スタッフの集まりについて Meet などを活用して基本的に全員が参加できる工夫を。

● 活動内容と運営

- 次年度も継続する受講者を受け入れるのであれば、活動内容、成果発表会の内容を変えていく必要があるのではないかと思います。
- グループワークの時間がもっとあっても良いかもしれない。
- グループで行う活動を増やすなど、いろいろな人と一緒に作り上げる内容を増やしてもいいのではないかと思った。
- 受講生に対してサポーター学生を増やす、活動日数を減らすなどの改善が出来たら良いと思った。
- 今年は7月から始まったため、帰省とかぶってしまった。初年度のように、後期だけやる方がいいと感じた。
- あらかじめ、サポーターの人数を決めてから受講者の受け入れをした方が良い。
- 事前面談をして受け取った情報を学生同士で共有して受講者さんのことについて情報を入れてから活動始めたかった。
- 活動期間がテスト期間と被らないようになると動きやすいと感じた。
- スタッフの人数をもっと増やす。受講者の特性や注意点をスタッフみんなで確認すること。もう少し計画的に行い、準備物やタスクを明確にすること。
- 受講生やその家族との距離感などについてルールを定めた方がよいと考える。またルールを作ったのであるなら受講生にも共有する必要があると思う。
- 半日ほどのプログラムでは疲れが出ている受講者の方がいたので、やはり難しい内容のプログラムの時は短めにした方がいいのかなと思いました。
- 解散の時間を帰りの別所線の電車の時間に合わせて、余裕を持って解散してほしいです。

● 個人情報と連絡方法

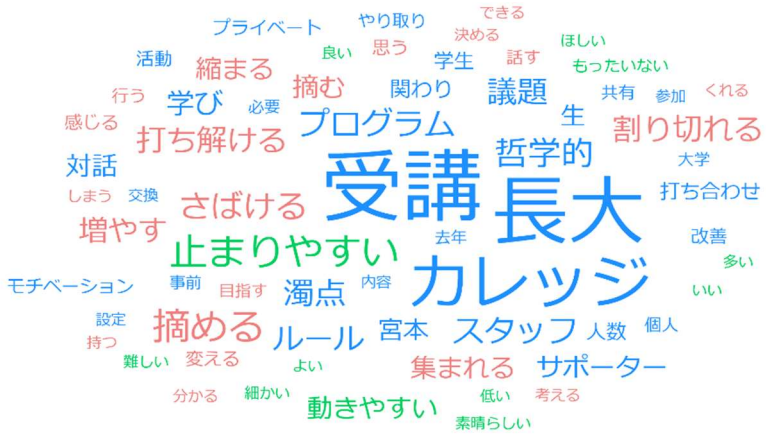
- 受講者との連絡先交換や個人情報の交換のあり方について今一度検討する必要があると思います。また、サポーターの学びのためという理由があってのこととは思いますが、学生個人の携帯電話からやり取りをする仕組みは変えた方がいいのではないかと思います。大学のメールアドレスからメールでやり取りする等、個人の電話番号を交換しなくても済む方法に変えられないでしょうか。
- 今年もスタッフと受講者のプライベートの関わりについて議題があがりました。プライベートで関わることを何も思わないなら、個人として割り切れるならそもそも議題になりません。「どうしたらいい」「困った」と感じた人がいたから話に出ます。
- 受講生との関わり方のルールについて議論されていますが、個人的にそんなもの必要ないと思います。そのルールをきめるのであれば時間通りに来る・全出席などのルールも決めるべきなのかと思いました。

● その他の改善点

- 受講者さんの苗字の濁点の間違いについて一度情報共有させて頂いたはずですが、修了証でも濁点の間違いがあった点。
- 今年は続けて参加してくれた方もいたことから、初参加の人とモチベーションの差を感じ

てしまいました。最初の回にリブロホールで自分について発表することを伝えてくれていたものの、目標が定まっていないので何を目指したいのか分からなかったです。

- 先生が来年やりたいことを話してくれていましたが、カレッジ長大やメンバーに慣れるまでに時間がかかるのが事実です。スムーズに馴染んでいける人もいますが、去年と今年を見た感じ外部の人間を呼ぶのは段階を踏んでから、ましてや長大の生徒が1人1人顔と名前を覚えて話ができるようにならなければそもそも長大でやる意味がありません。
- 人数が増えれば目にもとまりやすいし注目されるでしょう、それだけ称賛されることを企画してくれていると思います。ただ、さばける人数で行わないと混乱が生じスタッフからのカレッジ長大への信頼もなくしかねます。
- 受講生間のコミュニケーションをより推進したい。先生と話したところ、一受講生対一サポーター—学生というやり方を変える話がでた。
- 哲学的対話が難しかったとの声が多いように感じる。哲学的対話が「大学の学び」というコンセプトの核として設定されたことは理解しているが、プログラムは受講生のために行うものである。受講生に楽しんでもらえるようにプログラムを考えたい。



※スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示しています。 単語の色は品詞の種類で異なっており、青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞・形容動詞、灰色が感動詞を表しています。

9.カレッジ長大関係者

【学生スタッフ】

4 年生)宮内夏菜

3 年生)太田駿　小林凛　小宮山瑠海　中原蒼生
森隆之助　藤岡美希

2 年生)青木夢花　大橋温仁　小山葵　佐度明日菜　小野田彩花
生越愛望　横川愛花　橋本瑛平　三輪千晴

1 年生)齊藤優美　鈴木綾花　澤田夕嬉　高木美凪
成沢久留美　中島日織

【コーディネーター】

三村仁志

小川夏帆

【教職員】

宮本秀樹　丹野傑史

片山優美子　青木雄一

久保田亜希子　池谷道英

金子樹里

増成和敏(装丁)

連携協議会の皆様(行政、医療福祉事業者、大学)

令和 6（2024）年度文部科学省委託事業

学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業

「大学・専門学校における生涯学習機会創出・運営体制のモデル構築」

障害者版 STEAM 教育のプログラム開発を目指して Ver.2

―自由になるための方法（リベラルアーツの「A」）を意識しながら―

編集;宮本秀樹　丹野傑史　片山優美子　青木雄一　久保田亜希子　三村仁志　小川夏帆

2025 年 2 月発行

令和 6 年度「カレッジ長大」教育プログラム開発事業

長野大学

〒386-1298　長野県上田市下之郷 658-1

TEL 0268-39-0001（代）

https://www.nagano.ac.jp/community_collaboration/region/college_nagadai/

長野大学